

001



■「かりほ」：「(稲の)刈穂」と「仮庵」(収穫のための仮小屋)の掛詞。■「苦(とま)」：菅(すげ)や茅(かや)などを編んで作った屋根。「苦をあらみ」の「み」は、理由や原因を示す接尾語です。－「苦が粗いので」の意味。

天智天皇 (てんじてんのう / てんちてんのう)

626～671 第38代天皇。中臣鎌足とともに蘇我氏を滅ぼし(乙巳の変)、大化の改新を断行。近江大津宮に遷都の後、即位。近江令を制定した。

In autumn rice field,  
What a rough meshed roof  
Of this watching \*cot!  
My sleeves are growing wet  
With the night \*dew \*dripping down.

001-The Emperor Tenchi

\*cot [kát] : (n) 粗末な小屋 \*dew [d(j)ú:] : 露、しずく \*drip down : 滴る

収穫前の見張り小屋に泊まってみると、萱(かや)の目が粗いから、夜露が、私の着物の袖をすっかりと濡らしてしまっているなあ。

<直訳>

In autumn rice field,  
秋の田で、  
What a rough meshed roof  
なんとまあ編み目の荒い萱(かや)の屋根だろう  
Of this watching \*cot!  
この見張り小屋の！  
My sleeves are growing wet  
私の袖が濡れている  
With the night \*dew \*dripping down.  
夜露が滴(したた)り落ちて。



■けらし：「けるらし」がつづまった形。「ける（過去の助動詞）＋らし（推定の助動詞）」で「～してしまったらしい」の意。■白妙の：「衣」にかかる枕詞。「雪・雲」など白いものにかかり、「真っ白・純白」の意味を表す。「白妙」は、楮類の樹皮の繊維で織った純白の布。■「てふ」：「といふ」がつづまった形。伝聞を表す。

持統天皇（じとうてんのう）

645～702 第41代天皇。天智天皇の第2皇女。天武天皇の皇后。飛鳥浄御原宮で即位し、飛鳥浄御原令（アスカキヨミハラヨウ）の施行や藤原京遷都などを行い律令体制の基礎を構築した。

Spring is already away;  
Summer seems coming.  
White \*garments are hung there  
On the top of Kaguyama-hill.

002-The Emperor Jito

\*garment [gáəmənt] : <-s> 衣類

もう春は過ぎ去り、いつのまにか夏が来てしまったようね。香具山には、あんなにたくさんのもっ白な着物が干されているのですもの。

<直訳>

Spring is already away;  
春はすでに過ぎている  
Summer seems coming.  
夏が来ているようだ。  
White \*garments are hung there  
白い着物がそこに掛けられている  
On the top of Kaguyama-hill.  
香具山の上に。

003



■「あしびきの」は、「山」にかかる枕詞。■「山鳥」：当時この鳥は、夜に雌雄が分かれて寝る習性があると考えられていたそうです。尾が長い方が雄。■ひとりかも寝む」の「む」は推量。

柿本人麿 (かきのもとのひとまる)

生没年不詳。白鳳時代を代表する歌人。歌聖。三十六歌仙の一人。雄大で力強い歌風に特徴があり、長歌の完成度は比類がない。下級官吏という説があるものの詳細は不明。

Shall I have to sleep alone?  
Missing you all night;  
It is as long as the tails  
Of \*pheasants in the wood.

003-Kakinomoto-no Hitomaro

\*pheasant [féznt] : 雉(きじ)

(夜になると、雄と雌が離れて寝るという山鳥だが、その) 山鳥の長く垂れ下がった尾のように、こんなにも長い長い夜を、私もまた、一人で寂しく寝るのだろうか。

<直訳>

Shall I have to sleep alone?

一人で寝ようか?

Missing you all night;

一晩中あなたがいなくて寂しくて、

It is as long as the tails

尾のように長く

Of \*pheasants in the wood.

山の雉(きじ)の



■「白妙の」は富士に掛かる枕詞。■雪はふりつつ」の最後の「つつ」は反復や継続。■ところで、今雪が降っているのであれば、山の頂上は見えないので、心象風景か？

山部赤人 (やまべのあかひと)

生没年不詳。奈良前期の歌人。柿本人麻呂と並ぶ歌聖。三十六歌仙の一人。自然を題材とする歌が多い。下級官吏であったという説があるものの詳細は不明。

Walking out into Tago-beach,  
I see the \*magnificent Mt. Fuji;  
Already covered with white.  
Snow seems to have fallen on the top.

004-Yamabe-no Akahito

\*magnificent [mægnɪfəsnt] : 雄大な

田子の浦の海岸に出てみると、見事な富士の山が見える。その高い峰には、今もしきりに雪がふり続けているようだ。

<直訳>

Walking out into Tago-beach,  
田子の浦に歩き出ると、  
I see the \*magnificent Mt. Fuji;  
雄大な富士山が見える。  
Already covered with white.  
既に白く覆(おお)われている。  
Snow seems to have fallen on the top.  
頂上に雪が降ったようだ。



■「声きく時ぞ 秋はかなしき」と、係り結びにより意味を強調。

■雄鹿は雌鹿を求めて鳴くとされています。この歌は、遠く離れた恋人を思う作者の境遇を踏まえて詠んだ歌だろうことは容易に想像できます。

**猿丸大夫**（さるまるだゆう）

生没年不詳。8世紀後半から9世紀前半頃の歌人と推定されるも詳細は不明。三十六歌仙の一人。古今集の真名序にその名が記されている。

**The cries of deer;  
Walking into the forest deep,  
Stepping on the red leaves,  
How lonesome the autumn is!**

005-Sarumaru

奥深い山の中で、紅葉をふみわけて、鳴いている鹿の声を聞くときは、この秋の寂しさが、いっそう寂しく感じられるなあ。

<直訳>

The cries of deer;  
鹿の鳴き声  
Walking into the forest deep,  
森深く入ってゆくと、  
Stepping on the red leaves,  
紅葉を踏み分けていると、  
How lonesome the autumn is!  
秋は何と寂しいことか！



■中国の伝説にもとづいて、冬の宮中の様子を詠んだ歌だそうです。霜が降りて真っ白になった宮中の階段を、七夕にかささぎ（鶺鴒）が作るという天の橋に見立てて詠んだものと言われます。

■別の解釈として、天の川を白い霜のようであると詠ったとする読み方もあります。

■「しろきをみれば」の「み（見）れ」は已然形であり、仮定でなく確定の意味。

**大伴家持**（おおともやかもち） 718?～785 大伴旅人の子。奈良時代の歌人。三十六歌仙の一人。万葉集の編者とされ、収録数は最多。越中守をはじめ地方・中央の官職を歴任。

**Upon the \*Magpie Bridge,  
I see the frost clearly laid;  
I know it is deep at night,  
Looking up at the starry heavens.**

006-Otomo-no Yakamochi

\*magpie [m'ægpà ] : (n) 鶺鴒 (かささぎ)、おしゃべりな人

かささぎが渡したという天上の橋のように見える宮中の階段か…、その上に降りた真っ白い霜を見ると、夜も随分と更けたのだなあ。

<直訳>

Upon the \*Magpie Bridge,  
鶺鴒(かささぎ)が渡した橋の上に、  
I see the frost clearly laid;  
横たわる霜がはっきり見える。  
I know it is deep at night,  
夜が更けているのがわかる。  
Looking up at the starry heavens.  
天上の橋を見上げて。

007



■「ふりさけみれば」は、「仰ぎ見れば」の意味。■最後の「かも」は、奈良時代によく使われた終助詞で、詠嘆を示す。

安倍仲麿 (あべのなかまろ)

阿倍仲麻呂。698?～770?717年の遣唐使に随行し、留学生として入唐。科挙に合格して玄宗に重用されるとともに、李白・王維らと交流するなど幅広く活躍。海難により帰国は果たせず、唐で没する。中国名、朝衡。

I looked up toward

Wide-stretched plain of heaven,

Is the moon the same that rises

Above Mount Mikasa in the land of Kasuga?

007-Abe-no Nakamaro

大空を振り仰いで眺めると、美しい月が出ているが、あの月はきっと故郷である春日の三笠の山に出た月と同じ月だろうか。(ああ、恋しいことだなあ)

<直訳>

I looked up toward

私は仰ぎ見た

Wide-stretched plain of heaven,

広大な天の平原を。

Is the moon the same that rises

昇る月は同じだろうか?

Above Mount Mikasa in the land of Kasuga?

春日の土地の三笠山の上に。



■「たつみ（辰巳）」は、東南の方角。■「しかぞすむ」は、「（私が）こうして住んでいる」の意味。「しか」を掛詞とみなして、「鹿が棲んでいる」という解釈もある。

■「うち」は、「憂」と「宇治」の掛詞。下の句は、「（私が）世の中を疎ましく思って（隠遁して）いる宇治山と、世間の人と言うようだ」のように解釈可能。■「なり」は伝聞の助動詞。

喜撰法師（きせんほうし）

生没年不詳。平安初期の歌人。六歌仙の一人。

My \*shabby hut is  
Southeast of the capital.  
Where I choose to live with deer.  
People call it "Mount of Gloom."

008-The Priest Kisen

\*shabby [ʃ'æbi] : (a) みすぼらしい

私の草庵は都の東南にあって、そこで鹿と静かにくらしている。しかし世間の人たちは(私が世の中から隠れ)この宇治の山に住んでいるのだと噂している。

<直訳>

My \*shabby hut is  
私のみすぼらしいあばら家は、  
Southeast of the capital.  
都の東南にある。  
Where I choose to live with deer.  
そこで、私は鹿と住むことを選ぶ。  
People call it "Mount of Gloom."  
人は「陰気な山」と呼んでいる。





■「いたづらに」は、「うつり」と「ふる」、「ながめせ」に係っている。■「ふる」が、「(雨が) 降る」と「(時が) 経る」の掛詞。■「ながめ」は、「眺め」と「長雨」。

#### 小野小町 (おののこまち)

生没年不詳。平安前期の歌人。六歌仙・三十六歌仙の一人。絶世の美人とされ、数多くの伝説を残す。

**\*Vainly faded away**

**Color of the flower.**

**My life passes by,**

**While watching rains falling.**

009-Ono-no Komachi

*\*vainly [véimli] : (ad) 無駄に、いたづらに*

花の色もすっかり色あせてしまいました。降る長雨をぼんやりと眺めているうちに。(わたしの美しさも、その花の色のように、こんなにも褪せてしまいました)

<直訳>

**\*Vainly faded away**

無駄に消え去ってしまった。

**Color of the flower.**

花の色は。

**My life passes by,**

私の命が過ぎ去ってゆく。

**While watching rains falling.**

降る雨を眺めている間に。



■特に深い意味がないように思われる内容を、心地よいリズムで歌っている。■逢坂（あふさか）の関は、「逢ふ」との掛詞となっています。■なお、「逢坂」は今の京都府と滋賀県の境にあった地名。今の大阪とは無関係。

#### 蟬丸（せみまる）

生没年不詳。平安前期の歌人。盲目の琵琶の名手との説があり、敦実親王に仕えたとも、醍醐天皇の第四皇子とも伝えられるものの、詳しい経歴は不明。

**This is such \*parting ways  
Where travelers come and go  
Friends or strangers - all are to meet  
At the gate of this "Meeting Hill."**

#### 010-Semimaru

*\*part [pɑːt] : (vi) 別れる (vt) 引き離す*

これがあの有名な、(東国へ)下って行く人も都へ帰る人も、ここで別れてはまたここで会い、知っている人も知らない人も、またここで出会うという逢坂の関なのだなあ。

#### <直訳>

**This is such \*parting ways  
これがかの分かれ道  
Where travelers come and go  
そこで、旅人が行ったり来たりする  
Friends or strangers - all are to meet  
友も、初めての人も一会いみえることになる  
At the gate of this "Meeting Hill."  
この「出会いの丘」の門で。**



■古語の「あま」は、海で生計を立てる人、漁師のこと。現代語の「海女」（あま）より一般的な意味。

参議篁 (さんぎたかむら)

小野篁 (おののたかむら) 802～852 文人官僚。令義解を編纂。遣唐副使となるも、二度の渡航に失敗した後、三度目は大使藤原常嗣と乗船の選定で衝突して渡航拒否。嵯峨上皇の逆鱗に触れ、隠岐に配流。後に許されて参議となる。

Over vast water,  
Towards \*myriads of \*isles far away;  
My boat has sets sail.  
Proclaim my journey to the \*court,  
The fishing boats \*thronging here.

011-Ono-no Takamura

\*myriad [mɪˈrɪəd] : 無数 \*isle [aɪl] : (n) <詩語> 小島 \*proclaim [praʊkˈleɪm] : (vt) 宣言する  
\*court [k'ɔ:t] : 宮中 \*throng [θr'ɔ:ŋ] : (vi) 群がる (n) 人だかり

(私は)はるか大海原を多くの島々目指して漕ぎ出して行つたと、都人に告げてくれないか、そこの釣舟の漁夫よ。

<直訳>

Over vast water,  
広大な海のかなたに  
Towards \*myriads of \*isles far away;  
はるか遠くの無数の島々に向かい  
My boat has sets sail.  
私の船は漕ぎ出す。  
Proclaim my journey to the \*court,  
宮中に、私の旅を告げよ  
The fishing boats \*thronging here.  
ここに集った舟人たちよ。

■ 「しばしとどめむ」の「む」は、意思を示す。



僧正遍照 (そうじょうへんじょう)

遍照 (遍昭) 俗名良岑宗貞 (よしみねのむねさだ) 816～890 六歌仙・三十六歌仙の一人。桓武天皇の孫。素性の父。仁明天皇に仕え、左近衛少将、藏人頭を歴任したが、天皇の崩御により出家。

The winds of heaven,  
Blowing up above through the path in the clouds;  
Close their gates for a while for me.  
To \*detain those heavenly maidens.

012-The Priest Henjo

\*detain [ditém] : (vt) 引き留める、留置する

空吹く風よ、雲の中にあるという(天に通じる)道を吹いて閉じてくれないか。天女たちの姿を、しばらくここに引き留めておきたいから。

<直訳>

The winds of heaven,  
天の風よ  
Blowing up above through the path in the clouds;  
雲の中の通り道を通して吹いている  
Close their gates for a while for me.  
私のためにしばらくの間通り道を閉じよ。  
To \*detain those heavenly maidens.  
天女たちを引き留めるために。



■「淵となりぬる」の「ぬる」は、完了を意味。■「つくばね（筑波嶺）」— 「筑波嶺」は、常陸（茨城県）の筑波山。男体山と女体山からなる。古代には、歌垣の地として有名。歌垣とは、春と秋に男女が集まって歌舞飲食する祭。自由な恋愛が許され、求婚の場としての役割もあった。■男女川 — 男体山と女体山を源流とする川。ここまでが序詞。

陽成院（ようぜいいん）

陽成天皇。868～949 在位 876～884 第57代天皇。9才で清和天皇から譲位されて即位したが、藤原基経によって廃位された。

**\*Dripping waters from Tsukuba-peak  
Have become Mina-stream deep;  
So my love has grown into the river.**

013-The Retired Emperor Yozei

\*drip [drɪp] : (vi) 滴(したた)る

筑波山の峰から流れてくる男女川(みなのがわ)も、(最初は小さなせせらぎほどだが)やがては深い淵をつくるように、私の恋もしだいに積もり、今では淵のように深いものとなってしまった。

<直訳>

\*Dripping waters from Tsukuba-peak

筑波山の峰から滴る水は、

Have become Mina-stream deep;

男女川の深さになった。

So my love has grown into the river.

私の恋も、その川のように大きくなった。



■「我ならなくに」= (あなたのせい。) ■「みだれそめにし」は、「(私の心が) 乱れ始めた」の意味。■「もちずり」は、忍ぶ草の葉や茎で染め上げた、乱れ模様の布で、陸奥(みちのく)、今の東北地方の特産物でした。

源融(みなもとのとおる) 822~895 嵯峨天皇の皇子で臣籍降下し、源の姓を賜る。六条河原に住んだことから河原左大臣とよばれた。宇治の別邸は後に平等院となる。贈正一位。

Michinoku \*dyed \*textiles  
Of \*tangled \*ferns leaves,  
Because of you  
I have become confused;  
But my love for you remains.

014-Minamoto-no Toru

\*dye [daɪ] : (vt) 染める \*textile [tɛkstail] : 織物 <dyed textiles : 染物> \*tangle [t'æŋgl] : (vt) もつれさす \*fern [f'ɜ:n] : シダ

奥州のしのぶもちずりの乱れ模様のように、私の心も(恋のために)乱れていますが、いったい誰のためにこのように思い乱れているのでしょうか。(きっとあなたの所為に違いありません)

<直訳>

Michinoku \*dyed \*textiles  
陸奥(みちのく)で染められた織物  
Of \*tangled \*ferns leaves,  
縷(もつ)れたシダの葉の  
Because of you  
あなたのせいで、  
I have become confused;  
私は混乱している  
But my love for you remains.  
しかし、あなたへの愛は続く。

■ 「雪は降りつつ」の「つつ」は、継続・反復を示す接続助詞。



光孝天皇 (こうこうてんのう)

830～887 在位 884～887 第58代天皇。藤原基経により廢位された陽成天皇に代わって55歳で即位。

In the spring field

I am walking for your \*sake,

Gathering green herbs;

My sleeves \*speckled with falling snow.

015-The Emperor Koko

\*sake <for one's sake> : ~ために \*speckle [spékl] : (vt) まだら模様をつける

あなたのために春の野に出て若菜を摘んでいましたが、雪が降ってきて、私の着物の袖にも雪が降りかかっています。(あなたのことを思いながら、こうして若菜を摘んでいるのです。)

<直訳>

In the spring field

春の野原で

I am walking for your \*sake,

私はあなたのために歩く

Gathering green herbs;

若菜を集めて

My sleeves \*speckled with falling snow.

袖に雪が降りかかり



■「いなば」は、「行なば」と「因幡」の掛詞。■「まつ」は、「松」と「待つ」の掛詞。■「まつとし聞かば」の「し」は、強意の副助詞。

中納言行平 (ちゅうなごんゆきひら)

在原行平 (ありわらのゆきひら) 818~893 平城天皇の孫。業平の兄。一門の子弟を教育するため、奨学院を設立。因幡守・太宰権帥・民部卿などを歴任。

We are parted, though;  
I'll come back to you soon.  
Should I hear the pining sound  
On the peak of Mount Inaba?

016-Ariwara-no Yukihiro

\*peak [pi:k] : 尖った山頂、峰、絶頂

あなたと別れて(因幡の国へ)行くけれども、稲葉の山の峰に生えている松のように、あなたが待っていると聞いたなら、すぐにも都に帰ってまいりましょう。

<直訳>

We are parted, though;  
私たちは別れた、が、  
I'll come back to you soon.  
私はすぐに戻ってくる。  
Should I hear the pining sound  
もしも松の音を聞いたなら、  
On the peak of Mount Inaba?  
因幡の山の峰の





■「ちはやぶる」は、神に続く枕詞。■からくれなゐに — 「唐（から）・呉（くれ）の藍」。「唐」は、唐伝来という意もあるが、単なる美称としても用いられる。「竜田川が水を唐紅色に括り染め（絞り染め）にする」のように解釈するのが普通だが、定家は、これとは別の解釈を提案：彼は「くくる」を「くぐ（潜）る」ととり、紅葉で埋め尽くされた川面の下を水が通り抜ける様子を描写したものであると解釈。

在原業平朝臣（ありわらのなりひらあそん）

在原業平 825～880 平城天皇の孫で行平の弟。六歌仙・三十六歌仙の一人。美男で、『伊勢物語』の主人公とされる。

Even in the \*ancient days,  
The Gods holding \*sway;  
I never heard the water  
Gleaming red with autumn leaves  
In Tatsuta's stream.

017-Ariwara-no Narihira

\*ancient [ˈeɪnfənt] : 古代の、往古の \*sway [sweɪ] : (vt, n) 揺する、<hold sway (成句) : 統治する>

(川面に紅葉が流れていますが)神代の時代にさえこんなことは聞いたことがありません。竜田川一面に紅葉が散りしいて、流れる水を鮮やかな紅の色に染めあげるなどということは。

<直訳>

Even in the \*ancient days,  
古代でさえ、  
The Gods holding \*sway;  
神々が統治する  
I never heard the water  
その川のことを聞いたことがない  
Gleaming red with autumn leaves  
秋の葉で赤く輝く  
In Tatsuta's stream.  
龍田川で。



■はじめの2句は序詞。「よる」の同音反復。■相手が自分のもとに来ない理由を推し量っているとも、男である読み手が人目を避けて女のもとへ行くとも解釈可能。■「よる」は、「寄る」と「夜」の掛詞。上を受けて「波寄る」となり、下に続いて「夜さへ」となる。「さへ」は、添加の副助詞。「昼はもちろん、夜までも」の意味。「や」は、疑問の係助詞。結びは、「らむ」。

藤原敏行朝臣 (ふじわらのとしゆきあそん)

藤原敏行 ?~901? 平安前期の歌人、能書家。三十六歌仙の一人。

In the evening gathering waves  
On the shore of Suminoe-\*reef,  
Why are you hiding from the eyes of people  
Even when I visit you in my dream?

018-Fujiwara-no Toshiyuki

\*reef [ri:f] : 岩礁、砂州

住の江の岸に打ち寄せる波のように (いつもあなたに会いたいのだが)、 どうして夜の夢の中でさえ、あなたは人目をはばかりて会ってはくれないのだろう。

<直訳>

In the evening gathering waves  
波が打ち寄せる夕べ  
On the shore of Suminoe-\*reef,  
住の江の岸で、  
Why are you hiding from the eyes of people  
あなたは何故人目を逃れるのか?  
Even when I visit you in my dream?  
夢の中であなたを訪ねている時でさえ。



■「ふし」は、「(蘆=アシの)節」と「臥し」の掛詞。「世(よ)」も「節(よ)」との掛詞。そして「ふし(節)」と「よ(節)」は「蘆」の縁語。■「すぐしてよとや」の「てよ」は、完了の助動詞「つ」の命令形です。最後の「や」は係助詞で、結語が消滅。

### 伊勢 (いせ)

平安前期の女流歌人。伊勢守藤原継蔭の娘。宇多天皇の寵愛を受け、伊勢の御とよばれた。

Just like a reed in Naniwa's \*marsh,  
We must never meet again  
Even for such a short time;  
As a piece of the \*reeds,  
Is this what you are asking of me?

### 019-Princess Ise

\*marsh [mɑːʃ] : 沼地 \*reed [ri:d] : (n) 蘆 (あし)、葎き藁(ふきわら)

難波潟の入り江に茂っている蘆(あし)の、短い節と節の間のような短い時間でさえお会いしたいのに、それも叶わず、この世を過していけとおっしゃるのでしょうか。

### <直訳>

Just like a reed in Naniwa's \*marsh,  
難波潟の沼地の蘆(あし)のように、  
We must never meet again  
再開することは決してないに違いない。  
Even for such a short time;  
ほんのわずかの間でさえ、  
As a piece of the \*reeds,  
その蘆の一節のように、  
Is this what you are asking of me?  
これが、あなたが私に求めているものなのですか？



■「わびぬれば」の「わび」は、動詞「わぶ」の連用形で、「悩み苦しむ」の意味。■「いまはたおなじ」の「はた」は、副詞で現代語の「また」の意味。「ハタ」と発音。■「みをつくし」は、「身を尽くし」と「漣標」の掛詞。「難波なるみをつくし」は、「難波潟にある漣標」の意味で、歌の修辞。■古語の「漣標（みをつくし）」は、岸に立てて船の航路を示す標識。「漣標」の語源は「漣つ串」で、「漣」は小舟の航路の意味。

元良親王（もとよししんのう）

890～943 陽成天皇の皇子。『大和物語』などでは、色好みとして描かれている。

In this \*dire \*distress

My life is meaningless.

So we must meet now in the Bay of Naniwa

Even though it costs my life.

020-The Imperial Prince Motoyoshi

\*dire [dɑːr] : (a) 悲惨な、差し迫った \*distress [dɪstrɛs] : 苦痛、悲嘆、災難

あなたにお逢いできなくて、このように思いわびて暮らしていると、今はもう身を捨てたのと同じことです。いっそのこと、あの難波のみおつくしのように、この身を捨ててもお会いしたいと思っています。

<直訳>

In this \*dire \*distress

悲惨な苦しみの中では、

My life is meaningless.

私の命は無意味です。

So we must meet now in the Bay of Naniwa

だから、私たちは難波の入り江で会わなければなりません。

Even though it costs my life.

私の命を懸けてでも。



■「長月」は陰暦の9月で、特に夜が長い時期。■「有明の月」は明け方の月。

当時は、男が夜毎に女のもとに通う習慣でした。が、女と男の立場を入れ替えて解釈も可能。

素性法師（そせいほうし）

素性：俗名良岑玄利（よしみねのはるとし）生没年不詳。遍照の子。平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。左近将監に任官した後に出家し、権律師となる。

Just because he said,  
 “In a moment I will come.”  
 I've \*awaited him  
 Until the daybreak moon,  
 Of September has appeared.

021-The Priest Sosei

\*await [əwéit] : (vt) を待つ

「今すぐに行きましょう」とあのお方(男性)がおっしゃったので、(その言葉を信じて) 九月の長い夜を待っていましたが、とうとう有明の月が出る頃を迎えてしまいました。

<直訳>

Just because he said,  
 彼が言ったので、  
 “In a moment I will come.”  
 「すぐに来る」と、  
 I've \*awaited him  
 私は彼を待った  
 Until the daybreak moon,  
 夜明けの月  
 Of September has appeared.  
 9月の月が見えてくるまで。



■「山+風=嵐」という漢字を使った言葉遊び。■「嵐」には、「荒らし」の意味が掛けられている。■「むべ」は「なるほど」という意味の副詞。

文屋康秀（ふんやのやすひで）

生没年不詳。平安前期の歌人。六歌仙の一人。文屋朝康の父。

It is by this \*blowing,  
Autumn leaves and grass are driven pale  
Are wasted and driven.  
So they call this mountain wind  
The \*tempest.

022-Bunya-no Yasuhide

\*blow [blɒw] : (vi) 吹く \*tempest [tɛmpəst] : (vn) 暴風雨、大騒動

山風が吹きおろしてくると、たちまち秋の草や木が萎れてしまうので、その山風のことを「嵐(荒らし)」いうのだろう。

<直訳>

It is by this \*blowing,  
それは、この吹く風のため  
Autumn leaves and grass are driven pale  
秋の葉と草が色を失い、  
Are wasted and driven.  
枯れてしまう。  
So they call this mountain wind  
それで、人々はこの山を呼ぶ  
The \*tempest.  
嵐山と。



■「ちぢ（千々）」と「一つ」の対比表現。「一つ」は、ここでは「ひとり」の意味。

### 大江千里（おおえのちさと）

生没年不詳。平安前期の歌人、漢学者。中古三十六歌仙の一人。在原行平・業平の甥。宇多天皇の勅命により『句題和歌』を編纂。

**While viewing the moon,  
Many things come into my mind,  
And makes me so sad.  
Though it's not for me alone,  
That the autumn time has come.**

#### 023-Oe-no Chisato

秋の月を眺めていると、様々と思い起こされ物悲しくなります。秋はわたしひとりだけに来て来たのではないのですが。

#### <直訳>

While viewing the moon,  
月を眺めている間、  
Many things come into my mind,  
多くのことが心に浮かんでくる。  
And makes me so sad.  
それが、私を悲しくさせる。  
Though it's not for me alone,  
私一人のためだけではなく、  
That the autumn time has come.  
秋がやってきているのは。



■「ぬさ（幣）」は、神への捧げ物のひとつ。「ぬさもとりあへず」は、「（急で）幣を用意できず」の意味。■「手向山（たむけやま）」は、幣を捧げる山を指す。固有名詞ではない。■「神のまにまに」は、「神の御心のまにまに」■「このたび」は、「この旅」と「この度」の意味の掛詞。

#### 管家（かんげ）

菅原道真（すがわらのみちざね） 845～903 文人官僚。894年、遣唐使に任ぜられたが、建言により廃止。従二位・右大臣となるも、藤原時平により太宰権帥に左遷。『類聚国史』、『三代実録』などを編集。没後、学問の神、天満天神とされる。贈正一位。

No offering I could bring;  
 Since this trip was \*urgent,  
 See Mount Tamuke, instead!  
 Here are \*brocades of red leaves  
 As a \*tribute to the gods.

#### 024-Sugawara-no Michizane

\*urgent ['æ:dʒənt] : (a) 火急の、緊急の \*brocade [brookéid] : (n) 錦、金襴 \*tribute [tribju:t] : 貢物(みつぎもの)、捧げ物

今度の旅は急いで発ちましたので、捧げるぬさを用意することも出来ませんでした。しかし、この手向山の美しい紅葉をぬさとして捧げますので、どうかお心のままにお受け取りください。

#### <直訳>

No offering I could bring;  
 お供えを持っていくことができませんでした。  
 Since this trip was \*urgent,  
 今回の旅が急でしたので。  
 See Mount Tamuke, instead!  
 代わりに、手向山をご覧ください。  
 Here are \*brocades of red leaves  
 紅葉の錦がございます。  
 As a \*tribute to the gods.  
 神への捧げものとして。





■「逢坂山」は、「(女と男が)逢ふ」掛け言葉。■「さねかずら」は、つる草の一種で、「さねかずら」に「さ寝」(男女の添い寝)の意味が掛けられている。■「来る」は、「(つるを)繰る」との掛詞。つるは手繰ればこちら側に引き寄せることができ、男と女が出会うイメージを構成。■「もがな」は、願望の終助詞。

三条右大臣 (さんじょうのうだいじん)

藤原定方 (ふじわらのさだかた) 873~932 三条に邸宅があったことから三条右大臣とよばれた。

Trailing vine of "Meeting Hill,"

If your name is true,

Isn't there any way you can \*draw me to her

Hidden from gaze of people?

025-Fujiwara-no Sadataka

\*draw [dr'ɔ:] : (vt) 引き入れる

「逢う」という名の逢坂山、「さ寝」という名のさねかずらが、その名に違わぬのであれば、逢坂山のさねかずらを手繰り寄せるように、他人にわからず、あなたのもとに行く方法を知りたいものです。

<直訳>

Trailing vine of "Meeting Hill,"

「出会いの丘」の、探りよせるツタ。

If your name is true,

あなたの名前が本当なら、

Isn't there any way you can \*draw me to her

あなたは、私を彼女のもとへ引き入れてくれる手立てがありますか？

Hidden from gaze of people?

他人の目に触れないで。



■「なむ」は他者への願望を示す終助詞。 ■「貞信公」は、藤原忠平の諡号。

藤原忠平（ふじわらのただひら） 880～949 平安中期の貴族。藤原基経の子。時平の弟。「延喜格式」を完成。摂政・関白・太政大臣を歴任。長期にわたって政権の中枢に位置し、藤原摂関家の基礎をかためる。従一位・贈正一位。貞信公は諡号。

Red leaves on Mount Ogura,  
Won't you longingly await  
The \*imperial visit?  
If you are thoughtful enough.

026-Fujiwara-no Tadahira

\*imperial [impí(ə)riəl] : (a) 皇帝の、皇室の

小倉山の峰の美しい紅葉の葉よ、もしお前に(哀れむ)心があるならば、散るのを急がず、もう一度の行幸をお待ち申していてくれなにか。

<直訳>

Red leaves on Mount Ogura,  
小倉山の紅葉よ、  
Won't you longingly await  
切々と待ってくれないか？  
The \*imperial visit?  
行幸を。  
If you are thoughtful enough.  
お前に十分な思いやりがあるのなら。



■「みかの原を（二つに）分けて流れる泉川」の風景描写。■いつ見きとてか — 「見」は、「逢う」の意。「き」は、過去の直接体験を表す助動詞。「か」は、疑問の係助詞。後の「らむ」と係り結び。この歌には、解釈の手がかりとなる人間関係が示されていない。

中納言兼輔（ちゅうなごんかねすけ）

藤原兼輔（ふじわらのかねすけ） 877～933 平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。加茂川の近くに邸宅があり、堤中納言とよばれた。

**Izumi-stream \*gushing \*forth  
And flowing down over Mika-plain,  
I do not know when we met:  
Why then, do I miss you?**

027-Fujiwara-no Kanesuke

\*gush [g'ʌʃ] : (vi) 噴出する、湧き出す \*forth [f'ɔəθ] : (ad) 見える所へ、外へ

みかの原を湧き出て流れる泉川よ、(その「いつ」という言葉ではないが) その人をいつ見たとっては、恋しく思ってしまう。本当は一度たりとも見たこともないのに。

<直訳>

Izumi-stream \*gushing \*forth

湧き出す泉川

And flowing down over Mika-plain,

みかの原を流れ下る。

I do not know when we met:

会ったのはいつだったのか分からない。

Why then, do I miss you?

では、何故あなたがいなくて恋しいのだろうか？



■「かれぬと思へば」の「かれ」は、「(草が) 枯れ」と「(人が) 離れ」の掛詞。■「冬ぞさびしきまさりける」の「ぞ」は係助詞、詠嘆の助動詞の連体形「ける」により結ぶ。

源宗于朝臣(みなもとのむねゆきあそん)

源宗于 ?～939 平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。光孝天皇の孫でありながら、官位に恵まれず正四位下右京大夫にとどまる。『大和物語』に不遇を嘆く歌を残す。

Loneliness grows deeply  
In a mountain village;  
When friends are gone,  
Leaves and grass \*withered.

028-Minamoto-no Muneyuki

\*wither [wiðə] : (vi) 枯れる、萎(しお)れる

山里はいつの季節でも寂しいが、冬はとりわけ寂しく感じられる。友も途絶え、草も枯れてしまうのだと思うと。

<直訳>

Loneliness grows deeply  
孤独が深くなってゆく  
In a mountain village;  
山里で。  
When friends are gone,  
友はいなくなり、  
Leaves and grass \*withered.  
葉や草は萎(しお)れてしまっている。



■ 「ころあてに」 = 偶然に。あてずっぽうに・

凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）

生没年不詳。平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。『古今集』撰者の一人。官位は低かったが、紀貫之とならぶ歌壇の中心的人物とされた。

White chrysanthemums,  
Confused by the frost;  
I might pluck one by chance  
If it were your wish to pick.

029-Oshikochi-no Mitsune

無造作に折ろうとすれば、果たして折れるだろうか。一面に降りた初霜の白さに、いずれが霜か白菊の花か見分けもつかないほどなのに。

<直訳>

White chrysanthemums,  
白菊  
Confused by the frost;  
霜で見分けがつかない。  
I might pluck one by chance  
私は、無造作に摘む。  
If it were your wish to pick.  
それが、あなたの望みならば。



■「つれなく」は、「有明」の月であるとする解釈と、「別れ」であるとする解釈が可能。■古語の「あかつき（暁）」は、「明か時（あかとき）」が転じた言葉で、夜が明けようとする頃。■「有明」は明け方に月が残っている頃、またはその月。

壬生忠岑（みぶのただみね）

生没年不詳。平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。『古今集』の撰者の一人。忠見の父。

Like the morning moon,  
Cold and heartless was my love.  
But since parted,  
Nothing is more painful  
In the moonlight at daybreak.

030-Mibu-no tadamine

あなたと別れたあの時も、有明の月が残っていましたが、(別れの時のあなたはその有明の月のようにつれないものでしたが)あなたと別れてからというもの、今でも有明の月がかかる夜明けほどつらいものはないでしょうに。

<直訳>

Like the morning moon,  
有明の月のように、  
Cold and heartless was my love.  
冷たくつれなかった私の恋。  
But since parted,  
でも、別れてからは、  
Nothing is more painful  
これ以上の辛さはありません。  
In the moonlight at daybreak.  
夜明けの月明かりの中では。



■「朝ぼらけ」は朝、辺りがほのぼのと明るくなりかける頃。■  
 「降れる」は、「降る」の命令形に助動詞「り」の連体形が続いた形。この「り」は継続とも完了とも解釈可能。■「有明」は、陰暦で、16日以後月末にかけて、月が欠けるとともに月の入りが遅くなり、空に月が残ったまま夜が明けること。「有明の月」は、その状態に出ている月。

坂上是則 (さかのうえのこれのり)

生没年不詳。平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。坂上田村麻呂の子孫といわれ、蹴鞠の名手と伝えられる。

At the break of a day,  
 Just as the morning moon  
 Lightening the dim scene,  
 The village of Yoshino lies  
 In a haze of falling snow.

031-Sakanoue-no Korenori

夜が明ける頃あたりを見てみると、まるで有明の月が照らしているのかと思うほどに、吉野の里には白雪が降り積もっているではないか。

<直訳>

At the break of a day,  
 夜明けに、  
 Just as the morning moon  
 まるで朝日のように  
 Lightening the dim scene,  
 薄暗い景色を照らし、  
 The village of Yoshino lies  
 吉野の里がある  
 In a haze of falling snow.  
 降る雪の霏(もや)の中で。



■風のかけたるしがらみは — 「の」は、主格の格助詞。その後に、「かけたるしがらみ」と続くので、「風」が擬人化されている。「たる」は、動詞の連用形に接続しているので、完了の助動詞「たり」の連体形。「しがらみ」は、「柵」で、川の中に杭を打ち、竹や柴を横向きに結び付けて、水の流れをせきとめるもの。■「なが（流）れもあ（敢）へぬ」は、「流れ切れない」の意味。■流れもあへぬ — 「も」は、強意の係助詞。「あへ」は、「動詞+あへ」で、「完全に～する」の意。多くは、打消の語をとめない、「完全に～しきらない・しきれない」となる。

春道列樹（はるみちのつらき）

?～920 平安前期の歌人。壱岐守に任ぜられたが赴任前に没した。

**In a mountain stream**

**I found a \*wattled barrier**

**Built by the busy wind.**

**\*Yet it's only autumn leaves,**

**Powerless to flow away.**

032-Harumichi-no Tsuraki

\*wattle [wátl] : (vi) 編み枝で作る \*yet : (ad) それにもかかわらず

山あいの谷川に、風が架け渡したなんとも美しい柵があったのだが、それは（吹き散らされたままに）流れきれずにいる紅葉であったではないか。

<直訳>

**In a mountain stream**

谷川で

**I found a \*wattled barrier**

私は、編み枝の柵を見つけた

**Built by the busy wind.**

せわしい風で出来た

**\*Yet it's only autumn leaves,**

いや、それは、ただの紅葉だ

**Powerless to flow away.**

流れるには力ない。





■ひさかたの — 「光」にかかる枕詞。ほかに、「天・日・月・空・雲・雨」など天空や気象に関するものにかかる。 ■「しづ（静）心（ごころ）」は、花に心があるかのような擬人表現。

紀友則（きのともりのり）

生没年不詳。平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。『古今集』の撰者の一人であるが、完成前に没した。紀貫之の従兄弟。

**Under the peaceful light  
Of the spring sun  
In the days of spring,  
Why are the cherry blooms  
Falling so restlessly?**

033-Ki-no Tomonori

\*scatter [sk'ætə] : (vi) 散り散りになる ⇔ gather

こんなにも日の光が降りそそいでいるのどかな春の日であるのに、どうして落着いた心もなく、花は散っているのだろうか。

<直訳>

Under the peaceful light

長閑(のどか)な光の下で

Of the spring sun

春の太陽の

In the days of spring,

春の日に、

Why are the cherry blooms

なぜ桜の花は

Falling so restlessly?

慌ただしく散っているのか？



■「高砂」は、松の名所として知られた土地。■「なら／なく／に」は、断定の助動詞、打消の助動詞、接続助詞が続いた形。

藤原興風（ふじわらのおきかぜ）

生没年不詳。9世紀後半？～10世紀前半？平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。管弦の名手。

Who shall I make friends with?  
I have lived so old.  
Even this pine-tree of Takasago  
Gives me any comfort no longer.

034-Fujiwara-no Okikaze

(友達は次々と亡くなってしまったが) これから誰を友とすればいいのだろう。馴染みあるこの高砂の松でさえ、昔からの友ではないのだから。

<直訳>

Who shall I make friends with?  
私は、誰と友達になろうか？  
I have lived so old.  
私は、これほどに長く生きている。  
Even this pine-tree of Takasago  
高砂の松でさえ  
Gives me any comfort no longer.  
私には全く慰めを与えない。



■『古今集』には、この歌の詞書があります。それによると、初瀬参りの際にいつも宿としていた家に久しぶりに訪れたとき、疎遠なのを主人になじられたのに応えて作った歌であるとのことです。■詞書によれば、「花」といえば普通は桜だが、この歌では梅 (plum blossoms) を指している。■「人はいさ」の「いさ」は副詞で、「さあ (どうでしょうか)」。

紀貫之 (きのつらゆき)

866?~945? 平安前期を代表する歌人。三十六歌仙の一人。

『古今集』の撰者の一人にして仮名序の執筆者。最初のかな日記である『土佐日記』を著す。

**What is in your mind I cannot know  
But in my hometown,  
The plum blossoms smell  
As sweet as the days gone by.**

035-Ki-no Tsurayuki

さて、あなたの心は昔のままであるかどうか分かりません。しかし馴染み深いこの里では、花は昔のままの香りで美しく咲きにおっているではありませんか。(あなたの心も昔のままですよ)

<直訳>

What is in your mind I cannot know  
あなたの心の中は何なのか、私は分からない  
But in my hometown,  
しかし、私の故郷では、  
The plum blossoms smell  
梅の花が香る  
As sweet as the days gone by.  
過ぎ去った日々のように甘く。



■「宵」は、夜になって間もないころ。「ながら」は、状態の継続を表す接続助詞で、「～のままで」の意。「ぬる」は、完了の助動詞の連体形。「を」は、逆接の確定条件を表す接続助詞。

「明けぬるを」で、「すっかり明けてしまったが」の意味。非科学的表現。 ■「月やどるらむ」の「らむ」は、現在推量。

清原深養父（きよはらのふかやぶ）

生没年不詳。平安前期の歌人。元輔の祖父。清少納言の曾祖父。内蔵大允。

**Summer night:**

**The evening still seems present,**

**Where in the clouds**

**Does the wandering moon dwell?**

*036-Kiyowara-no Fukayabu*

夏の夜は、まだ宵のうちだと思っているのに明けてしまったが、(こんなにも早く夜明けが来れば、月はまだ空に残っているだろうが) いったい月は雲のどの辺りに宿をとっているのだろうか。

<直訳>

Summer night:

夏の夜

The evening still seems present,

その夜はまだ続いているように見える

Where in the clouds

雲の中でどこに

Does the wandering moon dwell?

彷徨(さまよ)う月は宿るのか？



■「白露」は、葉の上についた露が白く光るさまを強調した表現。「に」は、「吹きしきく」という動作の対象を表す格助詞。「吹きしきく」は、しきりに吹くの意。「白露に風の吹きしきく」で「秋の野」にかかる連体修飾格。

文屋朝康（ふんやのあさやす）  
生没年不詳。平安前期の歌人。康秀の子。

Over the pure-white \*dew,  
\*Heedless wind is blowing by  
In the autumn field  
How the \*myriad \*unstrung gems  
Are scattered around!

037-Funya-no Asayasu

\*dew [d(j)ú:] : 露、(汗、涙の)滴 \*heedless : 無頓着な \*myriad [míriəd] : (n, a) 無数・の  
\*unstrung [ˈʌnstrʻʌŋ] : (a) 弦(つる)の外れた

(草葉の上に落ちた) 白露に風がしきりに吹きつけている秋の野のさまは、まるで糸に通してとめてない玉が、美しく散り乱れているようではないか。

<直訳>

Over the pure-white \*dew,  
透明な露を覆(おお)って  
\*Heedless wind is blowing by  
無頓着な風が吹き去ってゆく  
In the autumn field  
秋の野に  
How the \*myriad \*unstrung gems  
なんと、無数の結ばれていない宝石が  
Are scattered around!  
散り乱れていることか！



■忘らるる — 「るる」は、受身の助動詞「る」の連体形。男（『大和物語』によると藤原敦忠）に捨てられ、忘れられることを表す。■誓ひてし — 「誓ひ」は、二人の愛を神仏に誓うこと。「て」は、完了の助動詞「つ」の連用形。「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。■惜しくもあるかな — 「惜しく」は、天罰によって命が奪われることを惜しむ意。相手に対する執着・未練があることを表す表現。「も」は、強意の係助詞。「かな」は、詠嘆の終助詞。

右近（うこん）

生没年不詳。平安中期の女流歌人。右近少将藤原季繩の娘。醍醐天皇の皇后穩子に仕えた。

Though he \*forsook me,  
For myself I do not care:  
He made a promise,  
And his life, who is \*forsworn,  
Oh how \*cruel it would be!

038-Lady Ukon

\*forsake [fɔːsɛɪk] : (vt) 見捨てる \*forswear [fɔːswɛə] : (vt) 誓ってやめる \*cruel [kruːəl] : (a) 残酷な、悲惨な

あなたに忘れられる我が身のことは何ほどのこともありませんが、ただ神にかけて（わたしをいつまでも愛してくださると）誓ったあなたの命が、はたして神罰を受けるだろうと、惜しく思われてなりません。

<直訳>

Though he \*forsook me,  
彼は私を見捨てた、  
For myself I do not care:  
私にとっては、どうでもよい。  
He made a promise,  
彼は約束した、  
And his life, who is \*forsworn,  
だから、誓った彼の命は、  
Oh how \*cruel it would be!  
ああ、なんと残酷なものになることか！



■「浅茅（あさぢ）」は短い茅（ちがや）、「生（う）」はそれが生える場所のこと。■「小野（おの）」の「小」は調子を整えるための接頭辞で、「篠（しの）」は細い竹、「原」は植物が群生する場所。

参議等（さんぎひとし）

源等（みなもとのひとし） 880～951 平安中期の歌人。嵯峨天皇の曾孫。中納言源希の子。

A bamboo growing

Among the \*tangled \*reeds

Like my hidden love:

I still love her too deep to bear.

039-Minamoto-no Hitoshi

\*tangle [t'æŋgl] : (vt) もつれさす \*reed [ri:d] : 葦(よし)、蘆(あし)、篠(しの)

浅茅(あさぢ)の生えた寂しく忍ぶ小野の篠原ではありませんが、あなたへの思いを忍んでいます。もう忍びきることは出来ません。どうしてこのようにあなたが恋しいのでしょうか。

<直訳>

A bamboo growing

成長している竹

Among the \*tangled \*reeds

纏(もつ)れている葦(よし)の間で

Like my hidden love:

私の秘めた恋のように

I still love her too deep to bear.

彼女をあまりに深く愛しているので、もう耐えられません。



■しのぶれど — 「しのぶれ」は、バ行上二段の動詞「しのぶ」の已然形で、人目につかないようにする・他人に気づかれないようにするという意味。「ど」は、逆接の確定条件を表す接続助詞。■「色に出でにけり」は、隠していた思いが表情などの見て分かってしまう形であらわれた様子。

平兼盛（たいらのかねもり）

?～990 平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。光孝天皇の玄孫。家柄に比べて官位は低かったが、後撰集時代を代表する歌人となった。

Though I would hide it,  
My love has appeared on my face;  
They ask what it is  
So he guessed me:  
That is \*bothering me.

040-Taira-no Kanemori

\*bother [báðə] : 悩ます

人に知られまいと恋しい思いを隠していたけれど、とうとう隠し切れずに顔色に出してしまった。何か物思いをしているのかと、人が尋ねるほどまでに。

<直訳>

Though I would hide it,  
隠そうとしたのですが、  
My love has appeared on my face;  
私の恋は顔に出てしまいました。  
They ask what it is  
どうしたのかと、人が尋ねます。  
So he guessed me:  
ですから、その人は私を推察しました。  
That is \*bothering me.  
私を悩ましてしているということを。



041



■「てふ」は、「という」が縮まった表現。■「まだき」は、「早くも」の意味。■「しか」は過去を示す助動詞已然形。

壬生忠見（みぶのただみ）

生没年不詳。平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。忠岑の子。

**The rumor of my love  
Has already got around.  
It should have been kept secret,  
Because I just began to love.**

*041-Mibu-no Tadami*

わたしが恋をしているという噂が、もう世間の人たちの間には広まってしまったようだ。人には知られないよう、密かに思いはじめたばかりなのに。

<直訳>

The rumor of my love  
私の恋の噂は、  
Has already got around.  
すでに広まってしまった。  
It should have been kept secret,  
秘密にしておくべきだった  
Because I just began to love.  
恋が始まったばかりだったのだから。



■「ちぎりきな」の「き」は助動詞過去終止形。■「な」は感動を示す終助詞。■「かたみに」は「互いに」の意味。■「波こさじとは」の「じ」は助動詞終形・打消推量。

清原元輔（きよはらのもとすけ）

908～990 平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。深養父の孫。清少納言の父。梨壺の五人の一人として『後撰集』を編纂。

When a \*pledges was made  
Our sleeves were wet with tears.  
I wish our love would continue  
Until over Sue Pine-hill  
Ocean waves come across.

042-Kiyowara-no Motosuke

\*pledge [plédʒ] : (n) 誓約、公約、誓い

かたく約束を交わしましたね。互いに涙で濡れた袖をしぼりながら、波があつた末の松山を決して越すことがないように、二人の仲も決して変わることはありませんまいと。

<直訳>

When a \*pledges was made  
誓いがなされた時、  
Our sleeves were wet with tears.  
私たちの袖は涙で濡れました。  
I wish our love would continue  
私たちの恋が続くようにと願いました。  
Until over Sue Pine-hill  
末の松山を超えるまでは  
Ocean waves come across.  
波がやってきて。

043



■逢ひ見ての — 「逢ふ」と「見る」は、ともに男女の関係を結ぶことを表す。この歌の作者は男なので、「逢ひ見」で、女を抱くという意。■「て」は、接続助詞。「の」は、連体修飾格の格助詞。「逢ひ見て」を体言に準じて用いている。

権中納言敦忠 (ごんちゅうなごんあつただ)

藤原敦忠 (ふじわらのあつただ) 906~943 平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。時平の子。管弦の名手。

I have met my \*love.  
Now my heart is deeply overwhelmed.  
This sentiment compared  
I had never loved before.

043-Fujiwara-no Atsutada

\*love [l'av] : (n) (男性から見た)恋人

このようにあなたに逢ってから今の苦しい恋心にくらべると、会いたいと思っていた昔の恋心の苦しみなどは、何も物思いなどしなかったも同じようなものです。

<直訳>

I have met my \*love.  
私の恋人に会っていた。  
Now my heart is deeply overwhelmed.  
今は、私の心は深く圧倒されています。  
This sentiment compared  
この感情を比べれば  
I had never loved before.  
以前は、恋などなかったのです。



■「...なくば、...まし」という、反実仮想の表現。■「たえてしなくば」の「し」は間投助詞です。■「なかなか（中々に）」は、「かえって、なまじっか」の意味。

中納言朝忠（ちゅうなごんあさただ）

藤原朝忠（ふじわらのあさただ） 910～966 平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。定方の子。笙の名手。大食による肥満であったと伝わる。

**How I wish we had never met!**

**I would not \*grieve over your coldness**

**Nor be cursed with my misery.**

044-Fujiwara-no Asatada

\*grieve [grɪ:v] : (vt) 嘆く、心痛する

あなたと会うことが一度もなかったのならば、むしろあなたのつれなさも、わたしの身の不幸も、こんなに恨むことはなかったでしょうに。(あなたに会ってしまったばかりに、この苦しみは深まるばかりです)

<直訳>

How I wish we had never met!

会っていなかったらどんなに良かったことか!

I would not \*grieve over your coldness

あなたの冷たさを嘆くことはないでしょうに

Nor be cursed with my misery.

私の悲嘆を嘆くことも。



■『拾遺集』の詞書によると、付き合っていた女が冷たくなり、ついには、相手にしてもらえなくなったという状況で詠まれた歌とある。 ■あはれとも — 「あはれ」は、感動詞で、「ああ、かわいそうに」の意。「と」は、引用の格助詞。「も」は強意の係助詞。

**謙徳公** (けんとくこう)

藤原伊尹 (ふじわらのこれただ・これまさ) 924～972 平安中期の貴族、歌人。『後撰集』の撰者にして和歌所別当。摂政・太政大臣を歴任。正二位・贈正一位。謙徳公は諡号。容姿端麗と伝わる。

**There seems to be no one  
Who will sympathize  
With my lost love.  
Now I'm waiting only  
For my closing moment.**

045-Fujiwara-no Koremasa

\*sympathize [sɪmpəˈθaɪz] : (vi) 同情する、憐れむ

(あなたに見捨てられた) わたしを哀れだと同情を向けてくれそうな人も、今はいるように思えません。(このままあなたを恋しながら) 自分の身がむなしく消えていく日を、どうすることもできず、ただ待っているわたしなのです。

<直訳>

There seems to be no one  
誰もいないようだ  
Who will sympathize  
同情する人は  
With my lost love.  
私の失恋に。  
Now I'm waiting only  
今は、ただ待つだけ  
For my closing moment.  
私の終わりの瞬間を。



■「由良のと」の「と」は、海峡、瀬戸、河口などの意味。■  
 「かぢ」は、櫂（かい）や櫓（ろ）など、船を操作する道具の総称。■「かぢを（緒）」は「かぢ」をつなぐ紐であると解釈できる。

曾根好忠（そねのよしただ）

生没年不詳。平安中期の歌人。丹後掾。中古三十六歌仙の一人。自信家で奇人と伝わる。

Like a boatman

Sailing over the \*strait of Yura

With his \*rudder gone:

Where are we sailing

Over the deep of love?

046-Sone-no Yoshitada

\*strait [stréit] : (n) 海峡、瀬戸 \*rudder [r'ʌðə] : 舵(かじ)、方向舵(た)

由良の海峡を渡る船人が、かいをなくして、行く先も決まらぬままに波間に漂っているように、わたしたちの恋の行方も、どこへ漂っていくのか思い迷っているものだ。

<直訳>

Like a boatman

船人のように

Sailing over the \*strait of Yura

由良の海峡を航行し

With his \*rudder gone:

櫂(かい)をなくしたまま

Where are we sailing

私たちはどこを航行しているのか

Over the deep of love?

恋深く渡って？



■「宿のさびしきに」は、「の」を同格、「さびしき」を形容詞の連体形と解釈すれば、「さびしい宿に」の意味となる。「の」を主格、「に」を接続助詞として、「宿が寂しいので」とする説もある。■「人こそ見えね」は、係結びの表現です。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形。■『拾遺集』の詞書によれば、この歌は当時の川原院の情景を詠んだもの。川原院は、河原左大臣こと源融（14. みちのくの）の豪華な邸宅で、彼の死後は荒れ果ててしまい、恵慶の頃には風流人の集う場所となっていたらしい。

恵慶法師（えぎょう・えけいほうし）

恵慶 生没年不詳。平安中期の歌人。中古三十六歌仙の一人。播磨国の講師（国分寺の僧）と伝わる。

An old \*cottage standing

Thick-leaved vines overgrown,

There comes only \*dreary autumn.

047-The Priest Ekei

\*cottage [kɑtɪdʒ] : 田舎家、小さな宿 \*dreary [dri(ə)ri] : (a) 侘びしい、荒涼とした

このような、幾重にも雑草の生い茂った宿は荒れて寂しく、人は誰も訪ねてはこないが、ここにも秋だけは訪れるようだ。

<直訳>

An old \*cottage standing

立っている古びた田舎家

Thick-leaved vines overgrown,

成長し過ぎて葉が重なった蔦(つた)

There comes only \*dreary autumn.

ただ侘しい秋が来ている。



■ 「いたみ」の「いた（甚）し」は、程度がはなはだしい様子。  
（ちなみに、現代語の「おめでとう」は「めでたし」、つまり「愛（め）で甚（いた）し」に由来。）

源重之（みなもとのしげゆき）

?～1000? 平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。清和天皇の曾孫。地方官を歴任。陸奥守に左遷された藤原実方とともに陸奥に下って没した。

**\*Stricken wave dashed**

**By \*fierce winds on a rock,**

**So am I: alone and crushed,**

**Missing you.**

048-Minamoto-no Shigeyuki

\*stricken [stri(ə)n] : <strike—struck—stricken> 打ち付けられた \*fierce [fiə:s] : (a) 獯猛(どうもう)な、荒れ狂う

風がとても強いので、岩に打ちつける波が、自分ばかりが碎け散ってしまうように、(あなたがとてもつれないので) わたしの心は (恋に悩み) 碎け散るばかりのこの頃です。

<直訳>

\*Stricken wave dashed

強く打ちつける波

By \*fierce winds on a rock,

岩に、荒れ狂った風によって、

So am I: alone and crushed,

だから、私は一人きりで、打ちつけられる

Missing you.

あなたがいなくて寂しく。





■「みかきもり（御垣守）」は、宮中の門を警護する兵士。■  
 「衛士（ゑじ）」は、地方から集められた兵士。■物をこそ思へ  
 — 「こそ」と「思へ」は、係り結び。「物を思ふ」は、恋の物  
 思いをする意味。

大中臣能宣（おおなかとみのよしのぶ）

921～991 平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。梨壺の五人の一人として『後撰集』を編纂。伊勢大輔の祖父。神官。

The guard's fire at the imperial gateway —  
 Burning through the night,  
 Dull in ashes during the day —  
 Just like the love \*aglow in me.

049-Onakatomi-no Yoshinobu

\*aglow [əglóʊ] : (a, ad) 赤く燃えて

禁中の御垣を守る衛士のかがり火は、夜は赤々と燃えているが、昼間は消えるようになって、まるで、(夜は情熱に燃え、昼間は思い悩んでいる) わたしの恋の苦しみのようではないか。

<直訳>

The guard's fire at the imperial gateway —  
 宮殿の門での警備の火—  
 Burning through the night,  
 夜通し燃えて、  
 Dull in ashes during the day —  
 昼間は、どんより灰となり—  
 Just like the love \*aglow in me.  
 まるで、私の中で赤々燃える恋のようだ。



■「君がため」を、第2句「惜しからざり」に係るとした解釈と、「長くもがな」に係ると解釈がありうる。■「もがな」は、願望をあらわす終助詞。■思ひけるかな — 「ける」は、詠嘆の助動詞「けり」の連体形で、初めて気づいたことを表す。

藤原義孝（ふじわらのよしたか）

954～974 平安中期の歌人。中古三十六歌仙の一人。伊尹（これただ・これまさ：謙徳公）の子。行成（三蹟の一人）の父。天然痘により兄挙賢と同日死去。

For your precious sake,  
My life was not dear to me.  
Now I wish it might \*endure  
Long, long time to come.

050-Fujiwara-no Yoshitaka

\*endure [ɪnd(j)'ʊə] : (vt) 我慢する、(vi) 持続する

あなたに会うためなら惜しいとは思わなかった私の命ですが、こうしてあなたと会うことができた今は、いつまでも生きていたいと思っています。

<直訳>

For your precious sake,  
あなたのためなら、  
My life was not dear to me.  
私の命は大切ではなかった。  
Now I wish it might \*endure  
今は、永らえればと願う  
Long, long time to come.  
来てもらえる長い時間が。





■明けぬれば — 「ぬれば」は、「助動詞の已然形＋接続助詞“ば”」で、順接の確定条件。「ば」は、恒時条件を表し、「…と、…といつも」の意味。「明けぬれば」で、「明けると」の意で、男が女の家から帰る時が来たことを表す。

藤原道信朝臣（ふじわらのみちのぶあそん）

藤原道信 972～994 平安中期の歌人。中古三十六歌仙の一人。23歳で早世。

**Indeed I know the night**

**Will follow the dawn.  
Still, I am \*regretful  
For this dim light.**

052-Fujiwara-no Michinobu

\*regretful [rigrétʃ(a)l] : (a) 残念な、惜しくて、悔やんで

夜が明ければ、やがてはまた日が暮れてあなたに会えるものだと分かってはいても、やはりあなたと別れる夜明けは、恨めしく思われるものです。

<直訳>

Indeed I know the night

私はよく知っている、夜が

Will follow the dawn.

夜明けに続くものだというのを。

Still, I am \*regretful

それでも、私は悔やむ

For this dim light.

夜明けの光を。

## 053



■ひとり寝る夜の — 「の」は、主格の格助詞。「(夫が訪れず)一人で寝る夜が」の意。 ■「ものとかはしる」の「かは」は反語の意味の係助詞。

右大将道綱母 (うだいしょうみちつなのはは)

藤原道綱母 (ふじわらのみちつなのはは) ?~995 実名不明。平安中期の歌人。藤原倫寧の娘。藤原兼家の妻で道綱の母。『蜻蛉日記』の作者。

Through the long night hours,  
Lying alone awake with deep \*sighs  
Till the daylight comes.  
Can you realize how \*empty it is?

053-The Mother of Michitsuna

\*sigh [sáí] : (n) 溜息(ためいき)、嘆息 \*empty [émpiti] : (a)空虚な

(あなたが来てくださらないことを) 嘆き哀しみながらひとりで夜をすごす私にとって、夜が明けののがどれほど長く感じられるものか、あなたはいったいご存じなのでしょう。

<直訳>

Through the long night hours,  
長い夜の間、  
Lying alone awake with deep \*sighs  
深い溜息(ためいき)をつきながら一人で横になり  
Till the daylight comes.  
夜明けになるまで。  
Can you realize how \*empty it is?  
それがいかに虚ろなものか、分かりますか？



■今日を限りの命ともがな — 「今日」は、道隆が「忘れじ」と言った日。「限り」は、最後の意味。「と」は、引用の格助詞。「もがな」は、願望の終助詞で、「～であってほしい」の意味。

儀同三司母（ぎどうさんしのはは）

?～996 高階成忠の娘、貴子。藤原道隆の妻で伊周（これちか：儀同三司）、隆家、定子の母。平安中期の歌人。

Difficult it is  
Not to forget you forever you,  
Because you might change your mind.  
If so, this day I'd rather close my life.

054-The Mother of Korechika

いつまでも忘れまいとすることは、遠い将来まではとても難しいものですから、(あなたの心変わりを見るよりも早く) いっそのこと、今日を最後に私の命が終わって欲しいものです。

Difficult it is  
難しいので、  
Not to forget you forever you,  
あなたをいつまでも忘れないでいることは、  
Because you might change your mind.  
あなたが心変わりをするかも知れないので。  
If so, this day I'd rather close my life.  
もしそうなら、今日という日に私の命を終えたほうが良い。



■名こそ流れてなほ聞こえけれ — 「こそ」と「けれ」は、係り結び。「名」は、評判。「流れ」は、(評判が) 広まること。「こそ」は、強意の係助詞。

大納言公任 (だいなごんきんとう)

藤原公任 (ふじわらのきんとう) 966~1041 平安中期の歌人。藤原定頼の父。諸芸に優れ、『和漢朗詠集』、『拾遺抄』、『三十六人撰』を撰し、歌論書『新撰髓脳』、『和歌九品』、有職故実書『北山抄』、家集『公任集』などを著す。

The waterfall has long ceased to flow.  
But I can still hear  
The splashing sounds.  
Yes, the name ever flows with its \*fame.

055-Fujiwara-no Kinto

\*fame [feim] : (n) 名声

水の流れが絶えて滝音が聞こえなくなってから、もう長い月日が過ぎてしまっただが、(見事な滝であったと) その名は今も伝えられ、よく世間にも知れ渡っていることだ。

<直訳>

The waterfall has long ceased to flow.

滝は永らく流れを止めている。

But I can still hear

しかし、私はまだ聞こえる

The splashing sounds.

飛沫(しぶき)の音を。

Yes, the name ever flows with its \*fame.

そうだ、その滝の音は名声とともにずっと流れているのだ。



■「この世のほか」とは、あの世のこと。■逢ふこともがな — 「逢ふ」は、男女の関係を持つこと。「もがな」は、願望の終助詞で、「～であったらなあ」の意味。

### 和泉式部 (いずみしきぶ)

生没年不詳。平安中期の歌人。大江雅致（まさむね）の娘。和泉守橘道貞の妻。小式部内侍の母。『和泉式部日記』の作者。不貞により離縁され、父からも勘当された後、藤原保昌と再婚したが、不遇のうちに生涯を終えたとされる。

**My life will soon close.**

**I wish I could bring your memory**

**To the world to come.**

**So come and meet me once for all.**

### 056-The Lady Izumi Shikibu

私はもうすぐ死んでしまうことですが、私のあの世への思い出になるように、せめてもう一度なりともあなたにお会いしたいのです。

<直訳>

**My life will soon close.**

私の命はすぐに終わるでしょう。

**I wish I could bring your memory**

あなたの思い出を持って行けたら

**To the world to come.**

あの世へ。

**So come and meet me once for all.**

ですから、一度だけでも会いに来てください。





■めぐりあひて — 「めぐりあひ」の対象は、表面上、「月」であるが、新古今集の詞書から、友人（女性）。■見しやそれともわかぬ間に — 「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。「や」は、疑問の係助詞で、結びは省略。「それ」は、月。「わか」は、「わく（分く・別く）」の未然形。

紫式部（むらさきしきぶ）

970年代～1010年代 平安中期の作家、歌人。藤原為時の娘。藤原宣孝の妻。大式三位の母。『源氏物語』、『紫式部日記』の作者。幼少期から文学的才覚を現し、一条天皇の中宮彰子に仕えたころから『源氏物語』の執筆をはじめたとされる。

**We met out under the moon light.  
But before I could recognize you,  
The midnight moon had disappeared  
Hurriedly behind the clouds overhead.**

057-The Lady Murasaki Shikibu

久しぶりにめぐり会ったのに、それがあなたかどうか分からない間に帰ってしまうなど、まるで（早くも）雲に隠れてしまった夜中の月ようではありませんか。

<直訳>

We met out under the moon light.  
私たちは月明かりの下で巡り合った。  
But before I could recognize you,  
しかし、あなただと分かる前に、  
The midnight moon had disappeared  
真夜中の月は消えていた  
Hurriedly behind the clouds overhead.  
雲の後ろに急いで。



■「いで」は、感動詞で、「さあ」の意。「そよ」は、掛詞。指示代名詞+間投助詞で、「そのことですよ」という意を表すとともに、擬声語として、笹原がそよそよと音をたてるさまを表す。

■忘れやはする — 「やは」と「する」は、係り結び。「やは」は、反語の係助詞。「する」は、サ変動詞「す」の連体形で、「やは」の結び。

大式三位 (だいにのさんみ)

藤原賢子 (ふじわらのかたこ) 999~? 平安中期の歌人。藤原宣孝と紫式部の娘。大宰大貳高階成章の妻。後冷泉天皇の乳母。

**Mt. Arima sends the \*rustling winds**

**Across the bamboo field of Ina.**

**Who on earth will forget you**

**Hearing your voice blow rustling?**

058-The Lady Kattaiko, Daini-no Sammi

\*rustle[r'ʌsl] : (vi) カサカサ音を立てる

有馬山のおもとにある猪名(いな)の笹原に風が吹くと、笹の葉がそよそよと鳴りますが、そうです、その音のように、 どうしてあなたを忘れたりするものでしょうか。

<直訳>

**Mt. Arima sends the \*rustling winds**

有馬山は、カサカサ音を立てる風を送る

**Across the bamboo field of Ina.**

猪名の笹原を横切って。

**Who on earth will forget you**

誰があなたを忘れようものか

**Hearing your voice blow rustling?**

カサカサ吹いているあなたの声を聞いて。



■「やすらう」は「ためらう」の意味。 ■寝なましものを — 「な」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形。「ものを」は、逆接の接続助詞。「寝なましものを」で、もし～であれば、寝てしまったであろうにの意味。 ■さ夜更けて — 「さ」は、接頭語。 ■「かたぶく」は、月が西に傾くことで、夜明けが近付いたさまを表す。「かな」は、詠嘆の終助詞。

赤染衛門 (あかぞめえもん)

生没年不詳。平安中期の歌人。赤染時用(ときもち)の娘。実父は、母の前夫平兼盛か。大江匡衡(まさひら)の妻。匡房の曾祖母。中宮彰子に仕えた。『栄花物語』の作者という説も。

**I should have been in bed alone,  
Without waiting for you through the night.  
I was in vain gazing at the moon,  
Until it slipped down in the sky.**

059-The Lady Akazoe Emon

(あなたが来ないと知っていたら) さっさと寝てしまえばよかったものを、(あなたの約束を信じて待っていたら) とうとう明け方の月が西に傾くまで眺めてしまいました。

<直訳>

I should have been in bed alone,  
一人で寝ているべきだったのに、  
Without waiting for you through the night.  
夜通しあなたを待つことなしに。  
I was in vain gazing at the moon,  
虚(むな)しくずっと月を見ていました  
Until it slipped down in the sky.  
月が空を通り過ぎるまで。



■「生野」は、丹波（京都府福知山市）にある地名で、「行く」との掛詞。■「道」は、大江山を越え、いく野を通って行く道。■遠ければ — 「動詞の已然形＋接続助詞“ば”」で、順接の確定条件。■「ふみ」は、「文」と「踏み」の掛詞。母からの手紙が来ていないことと母のいる天の橋立へは行ったことがないことを表している。

小式部内侍（こしきぶのななし）

?～1025 平安中期の歌人。橘道貞と和泉式部の娘。年少の頃から歌の才能を現したが、20代で早世。

**Over Mt. Oe, so far away**

**The road to Ikuno;**

**I've never crossed the Bridge of Heaven**

**Still less have I seen the letter.**

*060-The Lady-in-Waiting Koshikibu*

(母のいる丹後の国へは) 大江山を越え、生野を通って行かなければならない遠い道なので、まだ天橋立へは行ったことがありません。(ですから、そこに住む母からの手紙など、まだ見ようはずもありません)

<直訳>

Over Mt. Oe, so far away

とても遠く大江山を越えて

The road to Ikuno;

生野への道のりは、

I've never crossed the Bridge of Heaven

天橋立を渡ったことはありません

Still less have I seen the letter.

ましてや、手紙を見たこともありません。



■「奈良」は、元明天皇による和銅3年（710）の遷都から約70年間にわたって帝都であった平城京。伊勢大輔は平安中期の歌人であり、当時の人々にとって、既に古都という印象を持たれていた。■「八重桜」は、八重咲きの桜で、ソメイヨシノより開花時期が遅い。■「けふ」は、今日。「いにしへ」との対照。■「九重」は、宮中。「八重」との対照。数が多い分、奈良よりも京都で“さらに”美しく咲きほこるさまを強調。

伊勢大輔（いせのおおすけ / たいふ）

生没年不詳。平安中期の歌人。伊勢の祭主大中臣輔親（おおなかとみのすけちか）の娘。能宣の孫。高階成順の妻。中宮彰子に仕えた。

### Double-flowered cherry trees

Once bloomed at the ancient capital Nara.

Now filling this palace

With sweet fragrance.

#### 061-The Lady Ise-no Ohsuke

昔、奈良の都で咲き誇っていた八重桜が、今日はこの宮中で、いっそう美しく咲き誇っているではありませんか。

<直訳>

Double-flowered cherry trees

八重桜は、

Once bloomed at the ancient capital Nara.

かつて、古都奈良で咲いた。

Now filling this palace

今は、この宮中で満開だ

With sweet fragrance.

甘い香りと共に。



■「鳥のそらね」は、鶏の鳴きまね。「はかる」は、「謀る」。齊の孟嘗君が秦から逃げる際、一番鶏が鳴いた後にしか開かない函谷関にさしかかったのが深夜であったため、食客に二ワトリの鳴きまねをさせて通過したという故事から。■「よに」は、決して・絶対にの意を表す呼応の副詞で、下に否定の語を伴う。「逢坂の関」の「あふ」は、「逢ふ」、即ち、逢瀬と「逢(坂)」の掛詞。あなた(藤原行成)と男女の関係を持つことは許さないということを重ねている。

#### 清少納言 (せいしょうなごん)

本名・生没年不詳。平安中期の作家・歌人。清原元輔の娘。深養父の曾孫。中宮定子に仕えた。『枕草子』の作者。和漢の学に通じ、平安時代を代表する女流文学者となった。

**Still in the middle of the night  
Though you imitate the rooster's crowing,  
This meeting gateway at Osaka  
Would never be deceived open.**

#### 062-The Lady Sei shonagon

夜の明けないうちに、鶏の鳴き声を真似て夜明けたとだまそうとしても、(あの中国の函谷関ならいざ知らず、あなたとわたしの間にある) この逢坂(おおさか)の関は、決して開くことはありません。

#### <直訳>

Still in the middle of the night  
まだ真夜中に  
Though you imitate the rooster's crowing,  
あなたが鶏の鳴き声を真似ても、  
This meeting gateway at Osaka  
逢坂の関所は  
Would never be deceived open.  
欺(あざむ)き開けられることは決してないでしょう。



■「思ひ絶ゆ」は、思い切る・あきらめるの意味。「な」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形で強意を表し、～てしまうの意。「む」は、意志の助動詞。「思ひ絶えなむ」で、思いをあきらめてしまおうの意味。「と」は、引用の格助詞。■人づてならで — 「で」は、打消の接続助詞で、～ないで・なくての意味。

左京大夫道雅（さきょうのだいぶまちまさ）

藤原道雅（ふじわらのみちまさ） 993～1054 平安中期の歌人。中古三十六歌仙の一人。藤原伊周の子。関白道隆・儀同三司母の孫。父伊周の失脚に加え、当子内親王との密通事件などの悪行によって、家柄に比べて職位ともに低くとどまった。

Is there any way

To send these words directly to you?

“I’m just dying for you now

So goodbye forever.”

063-Fujiwara-no Michimasa

今はもう、あなたのことはきっぱりと思い切ってしまうと決めましたが、そのことだけ人づてでなく、直接 あなたに伝える方法があればいいのですが。

<直訳>

Is there any way

ほかの方法があるだろうか

To send these words directly to you?

この言葉をあなたにじかに伝えるための？

“I’m just dying for you now

私は今、あなたに恋焦(こ)がれています。

So goodbye forever.”

だからこそ、永久の別れなのです。



■たえだえに — 「川霧」を受けて、川霧が徐々に晴れていくさまを表す主述関係であるとともに、「あらはれわたる」に続いて網代木があちこちに見えるようになってきたさまを表す連用修飾関係。■「わたる」は、網代木が現れる、即ち、見える状況が時間的・空間的に広がるさまを表す。■「瀬々」は、あちこちの瀬、即ち、川の水深が浅い部分。■「網代」は、網の代わりに木や竹を編んで作った漁具。それを立てる杭が網代木。

藤原定頼（ふじわらのさだより） 995～1045 平安中期の歌人。中古三十六歌仙の一人。藤原公任の子。容姿端麗で社交的な反面、小式部内侍をからかった時に即興の歌で言い負かされてそくさと逃げ帰るなど軽率なところがあった。

### In the early dawn

Mists over the Uji River slowly disappear.

From the \*shallows of the stream

The \*stakes of fishing nets appear.

### 064-Fujiwara-no Sadayori

\*shallow [ʃ'æloo] : (n) 浅瀬、(a) 浅い \*stake [steik] : 標識、杭(くい)

ほのぼのと夜が明けるとき、宇治川に立ちこめた川霧が切れ切れに晴れてきて、瀬ごとに立っている網代木(あじろぎ)が次第にあらわれてくる景色は、何ともおもしろいものではないか。

### <直訳>

In the early dawn

夜明けに

Mists over the Uji River slowly disappear.

宇治川にかかる霧がゆっくり消えてゆく。

From the \*shallows of the stream

浅瀬から

The \*stakes of fishing nets appear.

網代木が現れる。





■「うらみわび」の「わぶ」は、「気落ちする」の意味。「恨み」を「わび」に続くと解釈して、「恨む気力もなく」と解釈。

■「ほ（干）さぬ袖だに」の「だに」は、程度の軽い例をあげて、より重いものを強調する表現。■「（涙で濡れて）乾かす暇もない袖（が朽ちていくこと）さえ惜しいのに、恋のおかげで私の名声が朽ちていくことはもっと惜しい」ということ。

#### 相模（さがみ）

生没年不詳。平安中期の歌人。相模守大江公資（きんより）の妻。公資と離婚後、多数の男性と関係を持って評判となった。

Your heartless love put me in cold \*misery,  
And made my sleeves stained with tears.  
What has made me more miserable  
Is the rumor will decay my pride.

#### 065-The Lady Sagami

\*misery [míz(ə)ri] : (n) 苦痛、悲惨

あなたの冷たさを恨み、流す涙でかわくひまさえもない袖でさえ口惜いのに、この恋のために、（つまらぬ噂で）わたしの名が落ちてしまうのは、なんとも口惜しいことです。

#### <直訳>

Your heartless love put me in cold \*misery,  
あなたの心無い恋が、私を冷たい悲嘆に追いやった  
And made my sleeves stained with tears.  
そして、私の袖を涙で汚した。  
What has made me more miserable  
私をさらに惨めにしているものは、  
Is the rumor will decay my pride.  
私の誇りを汚くしてしまうだろう噂だ。



■「あはれ」は感動を表す形容動詞の語幹。この場合は、“愛しい”の意味。■山桜 — “山桜よ”という呼びかけを表し、山桜を擬人化している。金葉集の詞書によると、行尊が大峰山（現在の奈良県吉野郡）において、思いがけず山桜を見て詠んだ歌とある。

前大僧正行尊（さきのだいそうじょうぎょうそん）

1055～1135 平安後期の僧、歌人。源基平の子。天台座主、大僧正。

**A lonely cherry tree on the mountain,  
Won't you be my friend?  
No other people know us at all.**

*066-The Abbot Gyoson*

私がおまえを愛しむように、おまえも私を愛しいと 思ってくれよ、山桜。（こんな山奥では）おまえの他には私を知る人は誰もいないのだから。

<直訳>

A lonely cherry tree on the mountain,  
山の一本の桜の木よ、  
Won't you be my friend?  
私の友達になってくれないか？  
No other people know us at all.  
私たちを知るものは誰もいない。



■「手枕」は、腕枕。千載集の詞書によると、二条院に人々が集まって物語などをして夜を明かしたときに、周防内侍が、「枕がほしい」と言ったところ、御簾の下から藤原忠家が腕を差し出し、その誘いをかわすために、この歌を詠んだという。■「こそ」と「惜しけれ」は、係り結びの関係。「かひなく」は、腕（かいな）と甲斐・詮・効（かい）の掛詞。「む」は、仮定を表す助動詞。「名」は、浮名。「こそ」は、強意の係助詞。ほんの短い時間、腕枕で寝ただけで、意味のない浮名が立ったら口惜しいということ。

周防内侍（すおう / すほうのななし）

生没年不詳。平安後期の歌人。周防守平棟仲の娘か。仲子。後冷泉天皇から堀河天皇まで4代約40年にわたり女官として仕えた。

**With my head upon your arm  
In the dark of a short spring night,  
I'm afraid this innocent dream  
Might arouse a \*disgraceful \*reputation.**

067-The Lady-in-Waiting Suwo

\*disgraceful [dɪsgr'eɪs(ə)l] : (a) 不名誉な \*reputation [rɛpju'teɪʃən] : 評判、世評

春の夜のはかない夢のように、(僅かばかりの時間でも) あなたの腕を枕にしたりして、それですまらない噂が立つことにでもなれば、それがまことに残念なのです。

<直訳>

With my head upon your arm  
あなたの腕に私の頭を置いて  
In the dark of a short spring night,  
短い春の夜の暗闇で、  
I'm afraid this innocent dream  
私は、この無実な夢を恐れます  
Might arouse a \*disgraceful \*reputation.  
不名誉な評判が立つかも知れません。



■ 「うき世」の元の意味は、「憂き世」つまり、つらい思いをする世の中の意味。

### 三条院 (さんじょういん)

三条天皇。976～1017 在位 1011～1016 第67代天皇。冷泉天皇の第二皇子 [居貞 (おきさだ・いやさだ) 親王]。多病と藤原道長の専横により、後一条天皇に譲位。

Though I do not want to live on any longer,  
This midnight moon would be the one I \*cherish;  
If my life should remain  
In this weary world.

#### 068-The Retired Emperor Sanjo

\*cherish [tʃerɪʃ] : (vt) 心に抱く、大切にする

(もはやこの世に望みもないが) 心にもなく、このつらい浮世を生きながらえたなら、さぞかしこの宮中で見た夜の月が恋しく思 出されることであろうなあ。

<直訳>

Though I do not want to live on any longer,  
これ以上生き永らえたくはないが、  
This midnight moon would be the one I \*cherish;  
この真夜中の月は、私が大切に思うものになるだろう  
If my life should remain  
もしも、私の命が万一続くなら  
In this weary world.  
このうんざりする世の中で。



■「み室の山」は、本来は、神のおわす山という意味の普通名詞であり、同名の山が複数あるが、この場合は、竜田川の付近にある神南備山（奈良県生駒郡斑鳩町）。

能因法師（のういんほうし）

橘永愷（たちばなのながやす） 988～？ 平安中期の歌人。橘諸兄の後裔。藤原長能に和歌を学ぶ。文章生となった後に出家。

Blown off by the \*gusts of wind,  
Autumn leaves of Mimuro Mountain  
Turn Tatsuta's stream  
Into shining \*brocade.

069-The Priest Noin

\*gust [g'ast] : (n) 突風、火炎 \*brocade [brəʊkɛid] : 錦、金襴

嵐が吹き散らした三室の山の紅葉の葉が、龍田川 に一面に散っているが、まるで錦の織物のように美しいではないか。

<直訳>

Blown off by the \*gusts of wind,  
突風で吹き飛ばされた  
Autumn leaves of Mimuro Mountain  
三室の山の紅葉が  
Turn Tatsuta's stream  
龍田川を  
Into shining \*brocade.  
輝く錦に変える。



■さびしさに — 「に」は、原因・理由を表す格助詞。 ■  
 「宿」は、自宅の草庵。■「ながむれば」は、動詞の已然形＋接  
 続助詞“ば”で順接の確定条件であり、見渡すとの意味。

良暹法師（りょうぜん / りょうせんほうし）  
 良暹。生没年不詳。平安中期の歌人。祇園別当。

Out of loneliness  
 I left my small cottage.  
 Everywhere I saw was filled  
 With the same \*dusk of autumn.

070-The Priest Ryosen

\*dusk [d'ask] : (n) 薄暗がり、夕闇

寂しくて家を出てあたりを眺めてはみたが、この秋の夕暮れはどこも同じなのだなぁ。

<直訳>

Out of loneliness  
 寂しさから  
 I left my small cottage.  
 私の粗末な田舎家を出た。  
 Everywhere I saw was filled  
 私が目にした、どこもかしこも満ちていた  
 With the same \*dusk of autumn.  
 同じ秋の薄暗がりで。



- 夕されば — 「されば」は、移動するを意味するラ行四段の動詞「きる」の已然形+接続助詞「ば」で順接の確定条件。夕方になるとの意味。  
 ■門田 — 家の周辺にある田。■おとづれて — 音を立てるの意味。  
 ■芦のまろやに — 芦で葺いた粗末な小屋。この場合は、金葉集の詞書から、源師賢の山荘。■秋風ぞ吹く — 「ぞ」と「吹く」は、係り結びの関係。「ぞ」は、強意の係助詞。

大納言経信 (だいなごんつねのぶ)

源経信 (みなもとのつねのぶ) 1016~1097 平安後期の公卿・歌人。俊頼の父。三船(詩・歌・管弦)の才を合わせ持ち、有職故実(ゆうそくこじつ)にも通じた。

**When the dusk falls,  
 Rustling through the leaves  
 Of the rice patch at the gate.  
 Autumn wind is blowing.**

071-Minamoto-no Tsunenobu

夕方になると、家の前にある田の稲葉が音をたてて、葦葺きのそまつな小屋に秋風が吹き訪れることよ。

<直訳>

When the dusk falls,  
 暗闇が訪れる時、  
 Rustling through the leaves  
 葉がガサガサと音を立て  
 Of the rice patch at the gate.  
 家の前の、一区画の田の  
 Autumn wind is blowing.  
 秋風が吹いている。



■「音」は、噂・評判。■「高師」は、大阪府堺市から高石市にある高師浜と評判が高いことを表す「高し」を掛けたもの。■あだ波は — いたずらに立つ波。「は」は、強調を表す係助詞。■ かけじや袖の — 「じ」は、打消意志の助動詞で、～まいの意。■ぬれもこそすれ — 「こそ」と「すれ」は、係り結びの関係。「ぬれ」は、波で濡れることと涙で濡れることを掛けている。

祐子内親王家紀伊 (ゆうしなないしんのうけのきい)

生没年不詳。平安後期の歌人。平経方の娘で紀伊守重経の妹か。

後朱雀天皇の皇女祐子内親王に仕えた。

**\*Notorious are the waves**

**Sounding on Takashi beach**

**I'd rather not met you**

**Only to wet my sleeves.**

072-The Lady Kii

*\*notorious [noʊt'ɔ:riəs] : (a) 悪名高い*

評判の高い高師の浜の寄せてはかえず波で、袖を濡らさないようにしましょう。(移り気だと、噂の高いあなたに思いをかけて、わたしの袖を濡らさないでほしいのです。)

<直訳>

**\*Notorious are the waves**

悪名高い波

**Sounding on Takashi beach**

高師の浜での波音

**I'd rather not meet you**

あなたに会うことはやめておきたい

**Only to wet my sleeves.**

ただ私の袖を濡らすだけ。





■「高砂」は、砂が高く盛り上がった場所。■「尾の上」は、峰の上。ともに普通名詞であり、特定の場所を表す固有名詞ではない。■「外山」は、深山（みやま）・奥山の対義語で、人里近い山。この場合、桜が咲いた遠くの高い山の手前にある低い山。■「ず」は、打消の助動詞「ず」の連用形。「も」は、強意の係助詞。「なむ」は、他者に対する願望を表す終助詞。

権中納言匡房（ごんちゅうなごんまさふさ）

大江匡房（おおえのまさふさ） 1041～1111 平安後期の学者・歌人。匡衡・赤染衛門の曾孫。後三条天皇に登用され、撰関

家にはばかりことなく政治改革を推進した。

**Cherry trees are in bloom**

**On the mountain ridges of Takasago.**

**May no mists arise**

**Above the hills to hide the scene!**

*073-Oe-no Masafusa*

高砂の峰にも桜の花が咲いたようだから、(その桜を見たいので) 手前の山の霞よ、どうか立たないようにしてくれないか。

<直訳>

Cherry trees are in bloom

桜が咲いている

On the mountain ridges of Takasago.

高砂の峰に。

May no mists arise

霞が立たないように

Above the hills to hide the scene!

この景色を隠す丘の上に！



■「憂かり」は、ク活用の形容詞「憂し」の連用形で。「憂し」は、思うようにならない、自分の愛に忘れてくれないの意味。■「初瀬」は、現在の奈良県桜井市の地名で、初瀬観音（長谷寺）がある。■「山おろし」は、山から吹き下ろす激しい風。「よ」は呼びかけの間投助詞。山おろしを擬人化して呼びかけている。

源俊頼朝臣（みなもとのとしよりあそん）

源俊頼 1055～1129 平安後期の歌人。経信の三男。俊恵の父。白河法皇の院宣による勅撰集『金葉和歌集』の撰者。斬新な表現や技巧を凝らした作風で歌壇の革新的存在となり、保守派を代表する藤原基俊と対立した。

**Holy Kannon on this Hatsuse hill!**  
**Why are the gusts blowing even harder?**  
**Didn't I pray to you**  
**The maiden might calm her cold heart?**

074-Minamoto-no Toshiyori

私に冷たかった人の心が変わるようにと、初瀬の観音さまにお祈りしたのだが、初瀬の山おろしよ、そのようにあの人の冷たさがいっそう激しくなれとは、祈らなかったではないか…。

<直訳>

Holy Kannon on this Hatsuse hill!

初瀬の観音様よ！

Why are the gusts blowing even harder?

なぜ突風がさらに激しく吹くのか？

Didn't I pray to you

あなたに祈らなかったらどうか？（いや、祈りました。）

The maiden might calm her cold heart?

彼女の心が静まりますようにと？



■ 「させも」は、さしも草で、蓬(よもぎ)のこと。

藤原基俊 (ふじわらのもととし)

1060～1142 平安後期の歌人。藤原道長の曾孫で右大臣俊家の子。万葉集の次点(訓点)をつけた一人。藤原定家の父俊成に古今伝授を行った。保守派歌壇の代表的人物で、革新派の源俊頼と対立。人望がなかったため、学識・家柄の割に官位は上がらず、従五位上左衛門佐にとどまった。

Like a promising dew on the Sashimo plant,  
I put a hope of life on your \*pledge;  
Yet time flies. —  
The autumn is passing by.

075-Fijiwara-no Mototoshi

\*pledge [plédʒ] : (n) 約束、誓約

あなたが約束して下さった、させも草についた恵みの露のような言葉を、命のように持(たの)んでおりましたが、それもむなしく、今年の秋も過ぎてしまうようです。

<直訳>

Like a promising dew on the Sashimo plant,  
蓬(よもぎ)についた、吉兆の露のように、  
I put a hope of life on your \*pledge;  
あなたの約束に一縷(いちる)の望みを置きました。  
Yet time flies. —  
でも時は過ぎ—  
The autumn is passing by.  
秋が過ぎてゆきます。



■わたの原 — 大海原。 ■「雲居」は、雲のいるところ。 ■  
 沖つ白波 — 「つ」は、上代の格助詞で、“の”の意。

法性寺入道前関白太政大臣 (ほっしょうじにゅうどうさきのかんぱくだい  
 じょうだいじん)

藤原忠通 (ふじわらのただみち) 1097~1164 平安後期の公卿・歌  
 人。摂政関白藤原忠実の長男。慈円の父。藤原氏の氏長者として摂政・関  
 白・太政大臣となる。一度は氏長者の地位を弟頼長に奪われたが、保元の  
 乱で頼長を倒して回復した。書にも優れ、法性寺流を開いた。

When rowing into the \*vast ocean  
 And gazing out across the sea,  
 The white waves rolling far away  
 Are the clouds in the ever shining sky.

076-Fujiwara-no Tadamichi

\*vast [v'æst] : (a) 広大な

大海原に船を漕ぎ出してみると、遠くの方では、雲と見わけがつかないような白波が立っ  
 ているのが見える。(まことにおもしろい眺めではないか)

<直訳>

When rowing into the \*vast ocean  
 大海原に漕ぎ出し  
 And gazing out across the sea,  
 海のかなたに目を凝らす時、  
 The white waves rolling far away  
 遠くで渦巻く白波は  
 Are the clouds in the ever shining sky.  
 いつまでも輝く空の雲だ。



■瀬をはやみ — 川底が浅く、流れの速いところ。「AをBみ」で原因・理由を表す。「AがBなので」の意味。■「せか」は、力行四段の動詞「せく」の未然形。「せかるる」で、せき止められるの意味。「滝川」は、急流・激流。現代語の滝に相当する古語は、垂水(たるみ)。

### 崇徳院 (すとくいん)

崇徳天皇 1119～1164 在位 1123～1142 第75代天皇。名は顕仁(あきひと)。鳥羽天皇の第1皇子。5才で即位するも、22才の時、鳥羽上皇の命で異母弟の近衛天皇に譲位。近衛天皇崩御の後に即位した同母弟の後白河天皇と保元の乱で争い敗れて讃岐

に配流され、同地で崩御。

**As a swift stream**

**Divided in two by a rock;**

**May eventually meet though separated,**

**We may not be together in this life**

**Unite again very soon.**

### 077-The Retired Emperor Sutoku

川の流れが早いので、岩にせき止められた急流が時にはふたつに分かれても、またひとつになるように、わたし達の間も、(今はたとえ人にせき止められていようとも)後にはきっと結ばれるものと思っています。

<直訳>

As a swift stream

急流のように

Divided in two by a rock;

岩で二つに分かれた

May eventually meet though separated,

別れても遂には会うかも知れない、

We may not be together in this life

私たちは、この世では一緒にいられないかも知れない

Unite again very soon.

またすぐ結ばれるかも知れない。

078



■千鳥は歌では冬の鳥として詠まれ、その鳴き声は連れを求める声であると考えられていた。

源兼昌（みなもとのかねまさ）  
生没年不詳。平安後期の歌人。

The guard of Suma Gate,  
How many nights were you awakened  
By the \*shrills of \*plovers  
That come flying from Awaji Island?

078-Minamoto-no Kanemasa

\*shrill [ʃrɪl] : (n) 金切り声 \*plover [pl'ʌvə] : (n) 千鳥 (ちどり)

淡路島から通ってくる千鳥の鳴き声に、幾晩目を覚ましたことであろうか、この須磨の関の関守は…。

<直訳>

The guard of Suma Gate,  
須磨の関守  
How many nights were you awakened  
幾夜目が覚めたろうか？  
By the \*shrills of \*plovers  
千鳥の金切り声で  
That come flying from Awaji Island?  
淡路島から飛んでくる



■秋風に — 「に」は、原因・理由を表す格助詞。 ■「影」は、光。この場合は、月光。「の」は連体修飾格の格助詞。 ■「さやけさ」は、ク活用の形容詞「さやけし」＋接尾語「さ」で、名詞化したもの。はっきりしていることの意。体言止め。

左京大夫顕輔（さきょうのだいぶあきすけ）

藤原顕輔 1090～1155 平安後期の歌人。清輔の父。崇徳院の院宣による勅撰集『詞花和歌集』の撰者。

See how clear and bright  
The moonlight I see is!  
The clouds are drifting  
Driven by autumn wind.

079-Fujiwara-no Akisuke

秋風に吹かれてたなびいている雲の切れ間から、もれでてくる月の光は、なんと清らかで澄みきっていることであろう。

<直訳>

See how clear and bright  
見て御覧なさい、なんとすっきり明るいことか  
The moonlight I see is!  
私が見ている月明りは！  
The clouds are drifting  
雲が棚引いている  
Driven by autumn wind.  
秋風に引かれて。



■「長からむ」は、「黒髪」の縁語。「長からむ心」は、永久不変の愛情。■「も」は、係助詞。「知らず」は、信じがたいの意。■「今朝」は、後朝、すなわち、男女が結ばれた翌朝の意。「は」は、区別を表す係助詞で、この日の朝が特別であることを示す。

待賢門院堀河（たいけんもんいんのほりかわ）

生没年不詳。平安後期の歌人。源顕仲の娘。待賢門院に仕えた。

Does his love last long?

I'm not sure.

So my thoughts are as \*tangled

As my black hair of this morning.

080-The Lady Horikawa

\*tangle [t'æŋgl] : (vt) もつれさす

あなたの心は末永くまで決して変わらないかどうか、わたしの黒髪が乱れているように、わたしの心も乱れて、今朝は物思いに沈んでおります。

<直訳>

Does his love last long?

彼の愛は長く続くだろうか？

I'm not sure.

私には確信がない。

So my thoughts are as \*tangled

だから、私の心は乱れている

As my black hair of this morning.

今朝の黒髪のように。





■「つる」は、完了の助動詞「つ」の連体形。「つ」は、意思的・作為的な動作の完了に用いられる助動詞であり、ほととぎすを擬人化している。

■「ぞ」と「る」は、係り結びの関係。「有明」は、陰暦で、16日以後月末にかけて、月が欠けるとともに月の入りが遅くなり、空に月が残ったまま夜が明けること。「有明の月」は、その状態に出ている月。

後徳大寺左大臣 (ごとくだいじのさだいじん)

藤原実定 (ふじわらのさねさだ) 1139~1191 平安後期の公卿・歌人。右大臣公能 (きんよし) の子。定家の従兄弟。漢詩・今様・管弦などに優れていた。

**I turned backward.**

**I heard the \*cuckoo calling.**

**The only thing I found**

**Was the moon of early dawn.**

081-Fujiwara-no Sanesada

\*cuckoo [kú:ku:] : (n) カッコウ、ホトトギス <= a little cuckoo>

ほととぎすの鳴き声が聞こえたので、その方に目をやってみたが、(その姿はもう見えず) 空には有明の月が残っているばかりであった。

<直訳>

I turned backward.

私は振り向いた。

I heard the \*cuckoo calling.

不如帰(ほととぎす)が鳴いているのを聞いて。

The only thing I found

私が見つけたただ一つのは

Was the moon of early dawn.

夜明けの月だった。



■思ひわび — 「思ふ」＋「侘ぶ」で、思い悩む。この場合は、自分の思うようにならない恋の悩み。■「さても」は、それでも。■「ものを」は、逆接の接続助詞。

道因法師 (どういんほうし)

藤原敦頼 (ふじわらのあつより) 生没年不詳。平安後期の歌人。高齢に至るまで歌道に精進したものの、歌合で藤原清輔に敗れるなど、その評価は低かった。

Though my life is spared  
In deep \*distress and \*despair  
In your \*fickle mood,  
I cannot stop \*shedding my tears.

082-The Priest Doin

\*distress [distrés] : (n) 苦悩、苦痛 \*despair [dispéa] : (n) 絶望 \*fickle [fikl] : (a) 気まぐれな \*shed [shéd] : (vt) こぼす、流す

つれない人のことを思い、これほど悩み苦しんでいても、命だけはどうにかあるものの、この辛さに耐えかねるのは (次から次へと流れる) 涙であることだなあ。

<直訳>

Though my life is spared  
私の命は辛(かる)うじてあるが、  
In deep \*distress and \*despair  
苦悩と絶望の中で  
In your \*fickle mood,  
あなたの気紛(きまぐ)れで、  
I cannot stop \*shedding my tears.  
私は、涙を止めることができない。



■思ひ入る — 思い込む。「入る」には、山に「入る」意味が重ねられている。

皇太后宮大夫俊成（こうたいごうぐうのだいぶとしなり）

藤原俊成（ふじわらのとしなり） 1114～1204 平安末期・鎌倉初期の歌人・歌学者。定家の父。後白河法皇の院宣により『千載集』を撰進。歌論書『古来風体抄』、家集『長秋詠藻』などを著し、幽玄の歌風を確立した。平安期の古今調から鎌倉期の新古今調への転換期において、歌壇の第一人者として指導的な立場にあった。

**There is nowhere to escape  
From this weary world.  
I hid in the depth of the mountain,  
Even here the deer is crying.**

083-Fujiwara-no Toshinari

\*stag [st'æŋ] : (n) 牡鹿

世の中というものは逃れる道がないものだ。(この山奥に逃れてきたものの) この山奥でも、(辛いことがあったのか) 鹿が鳴いているではないか。

<直訳>

There is nowhere to escape  
逃れる所はどこにもない  
From this weary world.  
この煩(わずら)わしい世間から。  
I hid in the depth of the mountain,  
私は、山奥に身を隠したが、  
Even here the deer is crying.  
ここでさえ、鹿が嘆(なげ)き鳴いている。



■ 「ぞ」と「恋しき」は、係り結びの関係。「憂し」は、つらい。

藤原清輔朝臣（ふじわらのきよすけあそん）

藤原清輔 1104～1177 平安後期の歌人・歌学者。顕輔の子。藤原俊成とならぶ平安後期歌壇の双壁。二条天皇の勅命により『続詞花集』を撰進したものの、天皇崩御により勅撰集とはならず。歌論書『奥義抄』『袋草紙』、家集『清輔朝臣集』などを著した。

Should I keep lingering on,  
The present days would become \*cozy.  
Just as the past filled with \*grief  
Is coming calmly back to me.

084-Fujiwara-no Kiyosuke

\*cozy [k'əʊzi] : (a) 居心地が良い、寛ぎがある \*grief [gri:f] : (n) 悲痛、苦しみ

この先生きながらえるならば、今のつらいことなども懐かしく思い出されるのだろうか。昔は辛いと思っていたことが、今では懐かしく思い出されるのだから。

<直訳>

Should I keep lingering on,  
生き永らえるのなら、  
The present days would become \*cozy.  
今の日々は過ごしやすいと思えるのだろう。  
Just as the past filled with \*grief  
苦しみで満ちた過去が  
Is coming calmly back to me.  
心静かに私に戻ってきているように。



■夜もすがら — 「すがら」は、最初から最後まで。 「夜もすがら」で、一晩中。

俊恵法師 (しゅんえほうし)

俊恵 1113～? 平安後期の歌人。源俊頼の子。経信の孫。東大寺の僧であったが、経歴の詳細は不明。鴨長明の歌の師。僧坊の歌林苑で歌会を開催。平安後期歌壇の中心人物の一人。

All through the sleepless night,  
I lie \*longing for the dawn that \*lags.  
Even the bedroom shutter  
Is treating me unkindly.

085-The Priest Shunye

\*longingly [lɔŋŋli] : (ad) 恋々として \*lag [l'æg] : (vi) 沈滞する、のろのろする

一晩中恋しい人を思って悩んでいるので、早く夜が明けたらよいと思っているのですが、なかなか夜は明けず、寢室の隙間さえもわたしにつれなく感じられます。

<直訳>

All through the sleepless night,  
眠れない一晩中、  
I lie \*longing for the dawn that \*lags.  
なかなか明けない夜明けを待つ横になっている。  
Even the bedroom shutter  
寢室の隙間でさえも  
Is treating me unkindly.  
私を不親切に扱っている。



■「かこち顔」は、恨みに思う顔つき。「かこち顔なる」で、「(月に)恨みを持つかのような」の意を表す形容動詞。

**西行法師 (さいぎょうほうし)**

西行。俗名は、佐藤義清 (さとうのりきよ) 1118~1190 平安後期の歌人。北面の武士として鳥羽院に仕えた後に出家。日本各地を行脚しながら歌を詠んだ。新古今集には最多の94首が入撰。家集『山家集』。

**Is it the moon that saddens me  
With its melancholy light? — No!  
My tears are running  
Because I miss her.**

086-The Priest Saigyō

嘆き悲しめと月はわたしに物思いをさせるのだろうか。いや、そうではあるまい。本当は恋の悩みの所為なのに、まるで月の仕業であるかのように流れるわたしの涙ではないか。

<直訳>

Is it the moon that saddens me  
私を悲しませるのは月  
With its melancholy light? — No!  
憂鬱な明かりで? — いや、違う!  
My tears are running  
涙が流れるのは  
Because I miss her.  
彼女がいなくて寂しいからだ。

087



■「村雨」は、にわか雨。秋から冬にかけて、急に激しく降る通り雨。「の」は、連体修飾格の格助詞。■「露」は、雨露。■秋の夕暮れ — 体言止めにより、感動を表す。

寂蓮法師 (じゃくれんほうし)

寂蓮 俗名は、藤原定長 (ふじわらのさだなが) ? ~1202 藤原俊成の甥。はじめ俊成の養子であったが、俊成に実子定家がうまれたため、出家。『新古今和歌集』の撰者の一人となったが、完成前に没した。

An autumn evening

See the mists rising

Over the \*alder leaves.

Still wet with dew after showers.

087-The Priest Jakuren

\*alder [ˈɔːldə] : (n) ハンノキ、槇の木

あわただしく通り過ぎたにわか雨が残した露もまだ乾ききらないのに、槇の葉にはもう霧が立ちのぼっていく秋の夕暮れである。(なんとももの寂しいことではないか)

<直訳>

An autumn evening

秋の夕暮れ

See the mists rising

霧が立ち上るのを見よ

Over the \*alder leaves.

槇(まき)の葉の上に

Still wet with dew after showers.

俄雨(にわかあめ)の後、まだ濡れている。



■「難波江」は、摂津国（現在の大阪市）の湾岸地域で、芦が群生していた。歌枕。芦・かりね・ひとよ・みをつくしの縁語。■「かりね」は、「刈り根」と「仮寝」の掛詞。■「ひとよ」は、「一節」と「一夜」の掛詞。■みをつくしてや恋ひわたるべき — 「や」と「べき」は、係り結びの関係。「みをつくし」は、「漚標」と「身を尽くし」の掛詞。

皇嘉門院別当（こうかもんいんのべっとう）

生没年不詳。平安末期の歌人。源俊隆の娘。崇徳天皇の皇后、皇嘉門院聖子に仕えた。

After the night short as a joint of the \*reeds  
Growing in Naniwa Bay —  
With my whole heart,  
Must I long for you till this life fades?

088-The Attendant to The Empress Koka

\*reed [ri:d] : (n) 葦(よし)、芦(あし)、拭き藁

難波の入江に生えている、芦を刈った根のひと節ほどの短いひと夜でしたが、わたしはこれからこの身をつくして、あなたに恋しなければならぬのでしょうか。

<直訳>

After the night short as a joint of the \*reeds  
芦の一節ほどの短い夜の後  
Growing in Naniwa Bay —  
難波の入江に茂っている  
With my whole heart,  
一心に、  
Must I long for you till this life fades?

私は、この命が萎(しぼ)むまであなたを思い焦がれなければならぬのでしょうか？





■「玉の緒」は、玉を貫き通す糸。ここでは、自分の命。「よ」は、呼びかけの間投助詞。

式子内親王 (しよくし / しきしないしんのう)

? ~1201 平安末期・鎌倉初期の歌人。後白河天皇の第3皇女。賀茂斎院をつとめた後に出家。歌を藤原俊成に学んだ。

**My life \*may as well break now  
Like a string of \*gems become weak.  
If I live longer,  
My love might finally grow weak and fail.**

089-The Princess Shikishi

\*may as well~ : ~したほうが良い \*gem [dʒém] : (n) (特に、加工した) 宝石、玉(ぎょく)

わたしの命よ、絶えることなら早く絶えてほしい。このまま生きながらえていると、耐え忍んでいるわたしの心も弱くなってしまい、秘めている思いが人に知られてしまうことになろうから。

<直訳>

My life \*may as well break now  
私の命はもう尽きたほうが良い  
Like a string of \*gems become weak.  
一連の宝石の紐が弱くなるように。  
If I live longer,  
これ以上生きていれば、  
My love might finally grow weak and fail.  
私の愛は、結局弱くなってダメになるかも知れない。



■雄島のあまの袖だにも — 「雄島」は、宮城県の松島湾にある島。歌枕。「あま」の漢字は、「海人・海女」であり、漁師のこと。■色はかはらず — 「色」は、袖の色。「は」は、区別を表す係助詞。「漁師の袖の色は変わっていない」が、「私の袖の色は血の涙のせいで変わった」ことを表す。

殷富門院大輔 (いんぶもんいんのたいふ / たゆう)

生没年不詳。平安末期の歌人。藤原信成の娘。後白河天皇の第1皇女殷富門院亮子内親王に仕えた。

See how my tears have changed my sleeves!  
The fishermen's clothes on Ojima shore,  
Though drenched with salt water,  
Never change their colors.

090-The Attendant to The Empress Inpu

(涙で色が変わってしまった) わたしの袖をあなたにお見せしたいものです。あの雄島の漁夫の袖でさえ、毎日波しぶきに濡れていても、少しも変わらないものなのに。

<直訳>

See how my tears have changed my sleeves!  
私の涙で私の袖がどのように変わったかを見て下さい。  
The fishermen's clothes on Ojima shore,  
雄島の漁師の袖は、  
Though drenched with salt water,  
塩水でずぶ濡れになっても、  
Never change their colors.  
色が変わらないのに。



■「さむしろ」は、接頭語「さ」＋「筵」。また、「寒し」との掛詞。 ■衣かたしき — 当時、男女が同衾する場合は、互いの衣の袖を重ねて寝たことから、「衣かたしき」は、一人寝を表す。

後京極攝政前太政大臣（ごきょうごくせっしょうさきのだいじょうだいじん）

藤原〔九条〕良経（ふじわらのよしつね、くじょうよしつね） 1169～1206 平安末期・鎌倉初期の貴族・歌人。兼実の子。摂政、太政大臣を歴任。歌を藤原俊成に学んで歌壇の中心人物の一人になったほか、漢詩や書画にも優れていた。『新古今和歌集』の仮名序を執筆。

**Crickets' \*lonesome voice is heard —  
I'm sleeping alone in a cold bed.  
All through the frosty night,  
My koromo-sleeve spread on a rug.**

091-Fujiwara-no Yoshitsune

\*lonesome [l'əʊnsəm] : 人里離れた、寂しい

こおろぎがしきりに鳴いている霜の降るこの寒い夜に、むしろの上に衣の片袖を敷いて、わたしはたったひとり寂しく寝るのだろうか。

<直訳>

Crickets' \*lonesome voice is heard —  
蟋蟀(こおろぎ)の寂しい声が聞こえる—  
I'm sleeping alone in a cold bed.  
私は、冷たい床で一人寝ている。  
All through the frosty night,  
霜の降る一晩中。  
My koromo-sleeve spread on a rug.  
筵の上に着物の袖を敷いて。



■「潮干」は、引き潮。「に」は、時を表す格助詞。■人こそ知らね — 「こそ」と「ね」は、係り結びの関係。「人」は、世間の人。「こそ」は、強意の係助詞。「ね」は、打消の助動詞「ず」の已然形で、「こそ」の結び。「こそ…已然形」で、逆接を表す。

二条院讃岐 (にじょういんのさぬき)

1141?~1217? 平安末期・鎌倉初期の歌人。源頼政の娘。二条天皇、後鳥羽天皇中宮任子に仕えた。

**My sleeve is always wet with tears.  
As the rocks lying offshore  
Cannot be seen even at \*ebb-tide,  
So no one knows when it dries.**

092-The Lady Sanuki

\*ebb [éb] : (n) 引き潮

わたしの袖は、潮が引いたときも水面に見えない沖にあるあの石のように、人は知らないでしょうが、(恋のために流す涙で) 乾くひまさえありません

<直訳>

My sleeve is always wet with tears.  
私の袖は、涙でいつも濡れている。  
As the rocks lying offshore  
沖に沈んでいる岩のように  
Cannot be seen even at \*ebb-tide,  
引き潮でさえ見えない、  
So no one knows when it dries.  
袖が乾く時など誰も知らない。



■綱手かなしも — 「綱手」は、舟を陸から海に引くための引き綱。「かなし」は、痛切で胸がつまるほどの感情。「も」は、詠嘆の終助詞。

鎌倉右大臣（かまくらのうだいじん）

源実朝（みなもとのさねとも） 1192～1219 鎌倉幕府第3代将軍。頼朝の次男。兄頼家の死後、将軍となったが、実権は北条家にあった。右大臣就任の拝賀式が行われた鶴岡八幡宮で、頼朝の子公暁に暗殺された。藤原定家に和歌の指導を受ける一方で、万葉調の要素を取り入れた独自の和歌を完成させた。家集『金槐和歌集』

May our world remain as it is!  
 How touching the sight of a fishing boat  
 Drawn by ropes along the shore is!  
 On the calm seashore.

093-Minamoto-no Sanetomo

この世の中はいつまでも変わらないでいてほしいものだ。渚にそって漕いでいる、漁師の小舟をひき綱で引いている風情はいいものだからなあ…。

<直訳>

May our world remain as it is!  
 この世の中が、いつまでも続きますように！  
 How touching the sight of a fishing boat  
 漁師の小舟の景色はなんと感動的なことか  
 Drawn by ropes along the shore is!  
 海辺に沿って綱で引かれている  
 On the calm seashore.  
 静かな浜辺で。



■み吉野の — 「み」は、美称の接頭語。「吉野」は、大和国（現在の奈良県）中部にある地域。■さ夜更けて — 「さ」は、接頭語。■「ふるさと」は、古里で古都の意。かつて、離宮があった。■「寒く」は、ク活用の形容詞「寒し」の連用形でありことから、「ふるさと」の述語であり、「衣うつなり」にかかる修飾語でもある。

参議雅経（さんぎまさつね）

藤原〔飛鳥井〕雅経（ふじわらのまさつね、あすかいまさつね） 1170～1221 鎌倉初期の歌人。九条頼経の子。蹴鞠に優れ、飛鳥井流の祖となる。『新古今和歌集』の撰者の一人。

Down from Mount Yoshino's crest,  
A \*bleak autumn wind is blowing.  
In the dead of night.  
The ancient village \*shivers  
The sound of cloth beaten I hear.

094-Fujiwara-no Masatsune

\*bleak [bli:k] : (a) 寒々とした \*shiver [ʃivə] : (vi) (寒くて恐怖で)震える

吉野の山の秋風に、夜もしだいに更けてきて、都があったこの里では、衣をうつ砧(きぬた)の音が寒々と身にしみてくることだ。

<直訳>

Down from Mount Yoshino's crest,  
吉野の峰から  
A \*bleak autumn wind is blowing,  
寒々した秋風が吹いている。  
In the dead of night.  
真夜中に。  
The ancient village \*shivers  
古くからある村は、寒さで震える  
The sound of cloth beaten I hear.  
布を打つ音が聞こえる中で。



■おほけなく — 「身分不相応である・身の程をわきまえない」の意を表す、ク活用の形容詞「おほけなし」の連用形。 ■  
わが立つ杣に墨染の袖 — 「杣」は、杣山、すなわち、材木を切り出す山。ここでは、比叡山。「墨染の袖」は、僧衣。また、「おほふかな」へ続く倒置法。「墨染」は、「住み初め」との掛詞。

前大僧正慈円 (だいそうじょうじえん)

慈円 1155～1225 平安末期・鎌倉初期の僧・歌人・学者。関白藤原忠通の子。九条兼実の弟。良経の叔父。第62世、第65世、第69世、第71世天台座主。史論『愚管抄』

**Though I am still unworthy,  
I'll shield this \*woeful world  
With my black robe,  
Wishing for the \*salvation of Buddha.**

095-The Priest Jien

\*woeful [wóʊf(ə)l] : (a) 嘆かわしい \*salvation [sælvéɪʃən] : (n) 救済

身のほど知らずと言われるかもしれないが、(この悲しみに満ちた) 世の中の人々の上に、墨染の袖を被いかけよう。(比叡山に出家したわたしが平穩を願って)

<直訳>

Though I am still unworthy,  
私には、まだ相応(ふさわ)しくないのだが、  
I'll shield this \*woeful world  
この嘆かわしい世の中を遮蔽(しゃへい)するつもりだ  
With my black robe,  
私の黒い僧衣で、  
Wishing for the \*salvation of Buddha.  
仏の救いを願いながら。



■花さそふ — 花をさそう。主語は、「嵐」で、「嵐が花をさそって散らす」の意味。

入道前太政大臣 (にゅうどうさきのだいじょうだいじん)

藤原〔西園寺〕公経 (ふじわらのきんつね, さいおんじきんつね)

1171～1244 鎌倉前期の公卿・歌人。藤原定家の義弟。承久の乱に際して鎌倉幕府に内通し、乱後は幕府権力を背景に内大臣、太政大臣に昇進。京都北山に壮麗な西園寺(鹿苑寺〔金閣寺〕の前身)を建立するなど、藤原氏全盛期に匹敵する奢侈を極めた。

Not the flower storms

That the wild wind scatters

Around the court garden;

But what \*withers is I myself.

096-Fujiwara-no Kintsune

\*wither [m'ægpà] : (vi) 萎(しば)む、枯れる

(降っているのは) 嵐が庭に散らしている花吹雪ではなくて、降っているのは、実は歳をとっていくわが身なのだなあ。

<直訳>

Not the flower storms

花の嵐ではなく

That the wild wind scatters

吹き荒(すき)ぶ風が散らす

Around the court garden;

中庭のあちこちで、

But what \*withers is I myself.

萎(しば)んでいるのは、私自身なのだ。





■「藻塩」は、海水を滲みこませた海藻を焼き、水に溶かして煮詰め、精製した塩。「まつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の」は、「こがれ」の序詞。

権中納言定家（ごんちゆなごんさだいえ）

藤原定家（ふじわらのさだいえ [ていか]） 1162～1241 鎌倉初期の歌人。俊成の子。父俊成の幽玄体を発展させた有心体を提唱し、新古今調の和歌を大成した。『新古今和歌集』の撰者の一人であり、後に単独で『新勅撰和歌集』を撰進。『小倉百人一首』の撰者。歌論書『近代秀歌』『毎月抄』、日記『明月記』

Like the dry sea-weed  
Burning in the evening calm  
On the shore of Matsuo,  
I am \*aflake awaiting you in vain.

097-Fujiwara-no Teika

\*aflake [əflém] : (ad) 燃え立って

どれほど待っても来ない人を待ち焦がれているのは、松帆の浦の夕風の際に焼かれる藻塩のように、わが身も恋い焦がれて苦しいものだ。

<直訳>

Like the dry sea-weed  
乾いた海藻のように  
Burning in the evening calm  
夕暮れ時に焼かれている  
On the shore of Matsuo,  
松帆の海辺で、  
I am \*aflake awaiting you in vain.  
私は、無駄だと分かっていて、恋い焦がれて待っている。



■ならの小川 — 上加茂神社の御手洗川。枕詞。また、「なら」は、「檜」との掛詞。「奈良」ではない。■みそぎぞ夏のしるしなりける — 「ぞ」と「ける」は、係り結び。「みそぎ」は、「禊」で、川で身を洗い、罪や穢れをはらうこと。ここでは、六月禊をさす。「ぞ」は、強意の係助詞。「しるし」は、証拠。「ける」は、初めて気付いたことを表す詠嘆の助動詞「けり」の連体形で、「ぞ」の結び。

従二位家隆（じゅにいいえたか）

藤原家隆（ふじわらのいえたか） 1158～1237 平安末期・鎌倉初期の歌人。藤原俊成に和歌を学び、定家とともに歌壇の中心人物となる。『新古今和歌集』撰者の一人。

**Twilight falls on Nara's brook  
Gently stirring the oak leaves.  
The splash of purification  
Is but a sign of summer passing.**

098-Fujiwara-no Ietaka

風がそよそよと檜(なら)の葉を吹きわたるこの小川の夕方は、(もうすっかりと秋のような気配だが) 川辺の禊祓(みそぎはらい)を見ると、まだ夏であるのだなあ。

<直訳>

Twilight falls on Nara's brook

檜の小川を覆う夕暮れ

Gently stirring the oak leaves.

檜の葉に優しく吹き渡る。

The splash of purification

禊(みそぎ)の飛沫(しぶき)は

Is but a sign of summer passing.

しかし、夏が過ぎてゆく徴(しるし)だ。



■人も惜し人も恨めし — 「人も惜し」と「人も恨めし」は、並列。「惜し」は、いとおいしい。両方の「人」を同一人物とする説と別人とする説がある。■あぢきなく — 思うようにならない気持ちを表すク活用の形容詞、「あぢきなし」の連用形で、「思う」にかかる。

#### 後鳥羽院 (ごとばいん)

後鳥羽天皇 1180～1239 在位 1183～1198 第 82 代天皇。高倉天皇の第 4 皇子。諸芸、とくに歌道に優れ、和歌所を設置し、『新古今和歌集』を勅撰。承久の乱で敗れて隠岐に配流され、その地で崩御。

For friends I \*grieve,  
\*Foes I resent.  
I'm worried about this \*dreary world  
With all my sorrow.

#### 099 The Retired Emperor Gotoba

\*grieve [grɪ.v] : (vi) 心痛する、深く悲しむ \*foe [fəʊ] : 敵 \*dreary [dri(ə)ri] : 侘しい、陰気な

人が愛しくも思われ、また恨めしく思われたりするの、(歎かわしいことではあるが) この世をつまらなく思う、もの思いをする自分にあるのだなあ。

#### <直訳>

For friends I \*grieve,  
友のために心痛し、  
\*Foes I resent.  
敵のために憤慨する。  
I'm worried about this \*dreary world  
私は、この侘(わび)しい世の中を心配している  
With all my sorrow.  
私自身の悲しみと共に。



■ももしきや — 「ももしき」は、宮中。「や」は、詠嘆の間投助詞。 ■「しのぶ」は、「偲ぶ」と「忍ぶ草」の掛詞。「偲ぶ」は、懐かしく思う。「忍ぶ草」は、シダ類の植物で、荒廃を象徴する草。 ■昔なりけり — 「昔は」は、天皇に権威があった過去の時代。「けり」は、初めて気付いたことを表す詠嘆の助動詞。

順徳院 (じゅんとくいん)

順徳天皇 1197～1242 在位 1210～1221 第84代天皇。後鳥羽天皇の第3皇子。承久の乱で敗れて佐渡に配流され、その地で崩御。

**In this ancient house paved with a hundred stones,  
\*Vines \*creep over the \*eaves.  
Though they are \*numerous,  
My old memories are much more.**

100-The Emperor Juntoku

\*vine [váiŋ] : 蔓(つる) \*creep [kri:p] : 這う、絡みつく \*eaves [í:vz] : 軒、庇(ひさし)  
\*numerous [n(j)ú:m(ə)rəs] : (n) 夥(おびただ)しい

宮中の古びた軒の端に忍ぶ草が生えているのを見るに付けても、やはりしのぶにもしのびきれない昔であることだなあ。

<直訳>

In this ancient house paved with a hundred stones,  
百もの石で敷き詰められたこの古くからの家では、  
\*Vines \*creep over the \*eaves.  
蔓(つる)が軒(のき)を覆(おお)っている。  
Though they are \*numerous,  
その数がどんなに多くても、  
My old memories are much more.  
私の古い思い出は、それ以上だ。